

静岡市埋蔵文化財調査報告

小里前遺跡・庵原館跡（第4次）

－清水富士宮線（16区）建設に伴う発掘調査報告書－

2018

静岡市教育委員会

静岡市埋蔵文化財調査報告

小里前遺跡・庵原館跡（第4次）

－清水富士宮線（16区）建設に伴う発掘調査報告書－

2018

静岡市教育委員会

静岡市埋蔵文化財調査報告

小里前遺跡・庵原館跡（第4次）

－清水富士宮線（16区）建設に伴う発掘調査報告書－

2018

静岡市教育委員会



1. 調査区遠景（北から）



2. 第2面全景（西から）

例 言

1. 本書は、静岡県静岡市清水区庵原町 1561 地内に所在する小里前遺跡・庵原館跡（第 4 次）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査から整理作業並びに報告書作成は、静岡市から大成エンジニアリング株式会社が業務を受託し、静岡市教育委員会の監督のもと実施した。
3. 調査面積は、480㎡である。
4. 発掘調査から報告書刊行までの期間は以下の通りである。
発掘作業：平成 29 年 7 月 11 日～平成 29 年 11 月 6 日
整理作業及び報告書作成：平成 29 年 11 月 7 日～平成 30 年 3 月 28 日
5. 調査体制は以下の通りである。
監 督 員 天石夏実（静岡市観光交流文化局文化財課主査）
大畑慶介（静岡市観光交流文化局文化財課主事）
調査担当者 市川康弘（大成エンジニアリング株式会社）
調査補助員 横田龍介・戸部孝一（大成エンジニアリング株式会社）
6. 本報告書の編集は市川康弘が行った。
7. 本書の執筆分担は、以下の通りである。
第 1 章・第 7 章：天石夏実
第 2～6 章：市川康弘
8. 以下の項目において、多大なるご指導とご協力をいただいた。
出土須恵器・灰軸陶器について：後藤健一（前 湖西市教育委員会）
9. 本書の遺構写真は市川康弘が、遺物写真は大門直樹が撮影した。
10. 調査および本書を作成するにあたり、次の方々・機関に、ご指導・ご協力を賜った。記してお礼申し上げます。（敬称略・五十音順）
野尻義敬（株式会社パスコ）、山内伸浩（株式会社フジヤマ）、湖西市教育委員会
11. 本遺跡の出土遺物・実測図・写真等の諸資料は、全て静岡市教育委員会で保管している。
12. 発掘調査及び整理作業参加者は下記の通りである。（五十音順）
発掘作業参加者
赤堀弘一、岸山紀代子、杉山征男、鈴木秋夫、鈴木雅春、須田 智、宮崎礼子、宮谷眞一、望月秋美、望月省三
整理作業参加者
赤池俊男、宇田武司、可知直子、栗山結花、小室峯子、白井順子、末松 宏、菅沼昌子、菅鉢康弘、平野豊子、藤瀬和枝、堀田 勉

凡 例

1. 本書で使用した地図は、下記地形図・地図を基に作成した。
「ゼンリン電子地図帳 Zilver 19 全国版」2016 年（許諾番号 Z17BD 第 264 号）
2. 本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系平面直角座標第Ⅷ系に則している。
3. 平面図の方位は真北を示す。
4. 標高は、T.P.（東京湾中等潮位）を採用した。
遺構実測図中の数値はセクション図の水糸レベルを示す。
5. 遺構及び遺物実測図の縮尺は以下の通りである。
竪穴住居跡・・・1/60 ビット・・・1/30 カマド・・・1/30
弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・・・1/3 石製品・・・1/4
6. 遺跡・調査区名の略号は「O17IH16」とし、遺物注記等に用いた。
7. 全体図における遺構表記は以下の略号で示した。
S I : 竪穴住居跡 P : ビット
8. 遺構平面図と遺物実測図中のトーンは以下の通りである。
・地山：
・焼土範囲：
・土器赤彩部分：
・灰釉陶器施釉範囲：
・灰釉陶器断面：
・須恵器断面：
上記以外は各図にその内容を示す。
9. 遺物実測図のうち、整形や器面の摩耗により調整痕が不明瞭なものについては破線で示した。
10. 遺物拓影図は、向かって左に外面を、右に内面を示した。底面は下に示した。
11. 遺物観察表及び遺構計測表における計測値で、() は推定値、< > は現存値、— は不明・計測不能を示す。
12. 遺構覆土・土器の色調は、『新版標準土色帖 2008 年度版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行）を参考にした。
13. 写真図版の縮尺は、遺構は不同、遺物は実測図に準拠した。
14. 写真図版で各遺物に付した番号は挿図番号を示す。

目 次

巻頭図版

例 言

凡 例

目 次

挿図目次 / 挿表目次

図版目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡概観	3
第1節 遺跡の地形と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 周辺の主な遺跡	5
第3章 調査経過	8
第1節 調査区の設定と調査経過	8
第2節 調査方法	11
第4章 基本層序	12
第5章 検出遺構と出土遺物	17
第1節 平安時代末～中世（第1面）	17
第2節 奈良・平安時代（第2面）	19
第3節 古墳時代	42
第4節 弥生時代	45
第6章 考察	46
第1節 集落の変遷	46
第2節 奈良・平安時代の土器について	47
第7章 総括	52

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	周辺地形図	4
第3図	周辺遺跡分布図	6
第4図	調査区配置図	9
第5図	グリッド配置図	10
第6図	基本土層図①	13
第7図	基本土層図②	15
第8図	第1面遺構全体図	16
第9図	1号ビット実測図	17
第10図	第2面遺構全体図	18
第11図	1号竪穴住居跡実測図	20
第12図	1号竪穴住居跡カマド実測図	21
第13図	1号竪穴住居跡出土遺物①	22
第14図	1号竪穴住居跡出土遺物②	23
第15図	1号竪穴住居跡出土遺物③	24
第16図	2号竪穴住居跡実測図	27
第17図	2号竪穴住居跡カマド実測図	28
第18図	2号竪穴住居跡出土遺物	29
第19図	3号竪穴住居跡実測図	31
第20図	3号竪穴住居跡カマド実測図	32
第21図	3号竪穴住居跡出土遺物	33
第22図	4号竪穴住居跡実測図	34
第23図	4号竪穴住居跡出土遺物	34
第24図	2～9号ビット実測図	36
第25図	遺構外出土遺物(奈良・平安時代①)	39
第26図	遺構外出土遺物(奈良・平安時代②)	40
第27図	遺構外出土遺物(古墳時代後期)	42
第28図	遺構外出土遺物(古墳時代中期)	43
第29図	遺構外出土遺物(古墳時代前期)	44
第30図	遺構外出土遺物(弥生時代後期)	45
第31図	時期別住居跡分布図	46
第32図	土師器環・甕型式分類	47
第33図	奈良・平安時代土師器編年	49

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	7
第2表	ビット計測表①	17
第3表	1号竪穴住居跡出土遺物観察表	25
第4表	2号竪穴住居跡出土遺物観察表	30
第5表	3号竪穴住居跡出土遺物観察表	33
第6表	4号竪穴住居跡出土遺物観察表	34
第7表	ビット計測表②	35
第8表	遺構外出土遺物(奈良・平安時代)観察表	41
第9表	遺構外出土遺物(古墳時代後期)観察表	42
第10表	遺構外出土遺物(古墳時代中期)観察表	44
第11表	遺構外出土遺物(古墳時代前期)観察表	44
第12表	遺構外出土遺物(弥生時代後期)観察表	45

図版目次

巻頭図版 1 1. 調査区遠景（北から） 2. 第2面全景（西から）

図版 1 1. 調査区遠景（南から） 2. 調査前現況（南から）

図版 2 1. 東壁基本層序（西から） 2. 東壁基本層序近景①（西から） 3. 東壁基本層序近景②（西から）
4. 土層観察ベルト断面上層（南から） 5. 土層観察ベルト断面下層（南から）

図版 3 1. 第1面全景（南から） 2. 第2面全景（南から）

図版 4 1. 1号竪穴住居跡完掘（西から） 2. 1号竪穴住居跡土層断面 A・B（東から）
3. 2号竪穴住居跡カマド（南から）

4. 2・4号竪穴住居跡土層断面（東から） 5. 4号竪穴住居跡完掘（北から）

図版 5 1. 3号竪穴住居跡完掘（南から） 2. 3号竪穴住居跡土層断面 C（北から）

3. 3号竪穴住居跡カマド（南から）

4. 3号竪穴住居跡カマド掘り方（南から） 5. 作業風景

図版 6 1. 1号竪穴住居跡出土遺物①

図版 7 1. 1号竪穴住居跡出土遺物② 2. 1号竪穴住居跡出土遺物③

図版 8 1. 2号竪穴住居跡出土遺物 2. 3号竪穴住居跡出土遺物 3. 4号竪穴住居跡出土遺物

図版 9 1. 遺構外出土遺物（奈良・平安時代①）

図版 10 1. 遺構外出土遺物（奈良・平安時代②） 2. 遺構外出土遺物（古墳時代後期）

図版 11 1. 遺構外出土遺物（古墳時代中期） 2. 遺構外出土遺物（古墳時代前期・弥生時代後期）

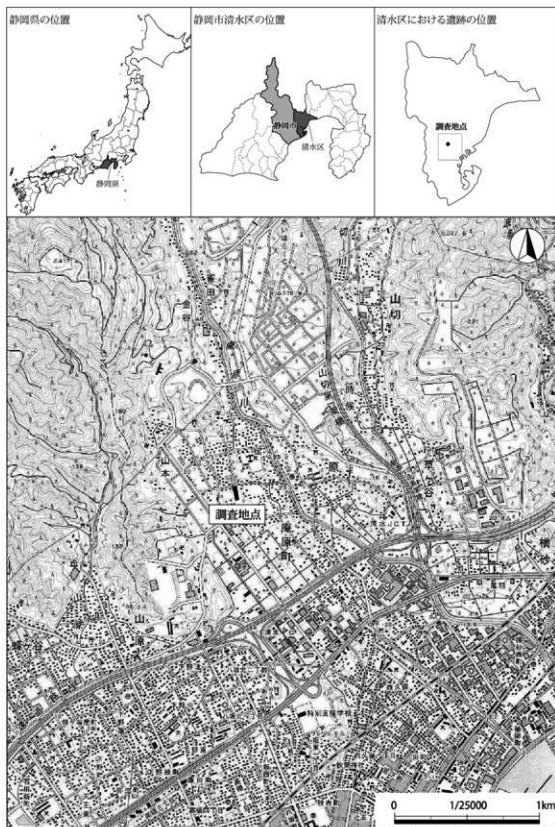
第1章 調査に至る経緯

今回の発掘調査対象となった小里前遺跡・庵原館跡は、静岡市清水区庵原町地内に所在する。小里前遺跡は弥生時代から中世にかけての散布地、庵原館跡は平安時代末から中世にかけての城館跡である。小里前遺跡は、1964（昭和39）年の土地改良事業に伴う水路工事が実施された際に、古墳時代前期、奈良・平安時代の遺物が100点ほど出土し、埋蔵文化財包蔵地として登録された。一方、庵原館跡については、今川氏に属した庵原氏の城館跡とされるが、これまで具体的な遺構、遺物は検出されていない。

小里前遺跡・庵原館跡において、静岡市（建設局道路部清水道路整備課）を工事主体とする、国道1号バイパスと新東名高速道路とを結ぶ清水富士宮線道路事業が計画され、遺構、遺物等の有無を確認するため、平成26年11月、静岡市教育委員会（文化スポーツ部文化財課・平成26年度当時・による補助執行）が確認調査を実施した。その結果、古墳時代から平安時代の遺物包含層が確認された。

このため、静岡市（清水道路整備課）から静岡市教育委員会へ文化財保護法第94条に基づく事業の通知が提出され、「本発掘調査」の指示が通知された。

静岡市教育委員会（観光交流文化局歴史文化課による補助執行）は、清水道路整備課からの委嘱（調査依頼）を受け、事業予定地内における事前の本発掘調査を実施するに至った。発掘調査は、発掘作業、資料整理作業、発掘調査報告書作成・刊行作業までを発掘調査支援業務として一括して民間調査組織（大成エンジニアリング株式会社）に委託し、文化財課担当者が監理する方法で実施した。



第1図 遺跡位置図

第2章 遺跡概観

第1節 遺跡の地形と地理的環境

小里前遺跡・庵原館跡は、静岡県静岡市清水区庵原町に所在する（第1図）。県中央部に位置する静岡市は、東海道が東西を往還する交通の要衝で、東に富士山、南は駿河湾を望む温暖な気候の土地柄である。その中で市内東部に位置する静岡市清水区は、南に向かい迫り出す北部の庵原丘陵と南部の有度丘陵、清水平野および三保半島に大別され、本遺跡は清水平野に立地する（第2図）。

清水平野は、竜爪山を構成する文殊岳（標高 1,041 m）に端を発する巴川の堆積作用により発達した三角州性の沖積平野であり、下流域では庵原丘陵から南流する塩田川や山原川を合わせ、折戸湾に流下する。そのため、表層は主に泥砂礫質ないしは砂泥質からなる。また午玉堂山、秋葉山の東には伊佐布の高山（標高 836 m）を源流とする庵原川が南流し、本遺跡付近で扇状地となり、途中で東側の山切川と合流し、駿河湾に注いでいる。

現在の庵原川は河川改修され、比較的直線化しているが、改修が行われるまでは幾重にもジグザグに蛇行を繰り返す緩やかな流れの河川であった。しかし、低湿地上を流れる低勾配の平地河川の特徴も持ち合わせており、豪雨時には洪水や氾濫を繰り返してきた。本遺跡の南側で数回に亘って調査された一丁田遺跡でも、弥生時代以降の氾濫によって流路がたびたび変遷した痕跡が確認されており、今回の調査地点でも同様に複数面で挙大から人頭大の礫が厚く堆積した河川氾濫の痕跡が確認されている。江戸時代にも支流の堆積土による流下阻害や浸水被害が起きており、改修が行われた現在でも集中豪雨や台風等の時には浸水被害が見られる。

清水平野の地形上の特徴として、清水湾岸に平行する浜堤列が3～4列認められる点が挙げられる。旧地形図を参照すると集落は浜堤列上に営まれ、その間には低湿地が広がる。その内最も内陸側の浜堤は、本調査地点の南方 1.5～2.0kmに位置する清水区袖師から同区西久保に至る箇所に相当する。

第2節 歴史的環境

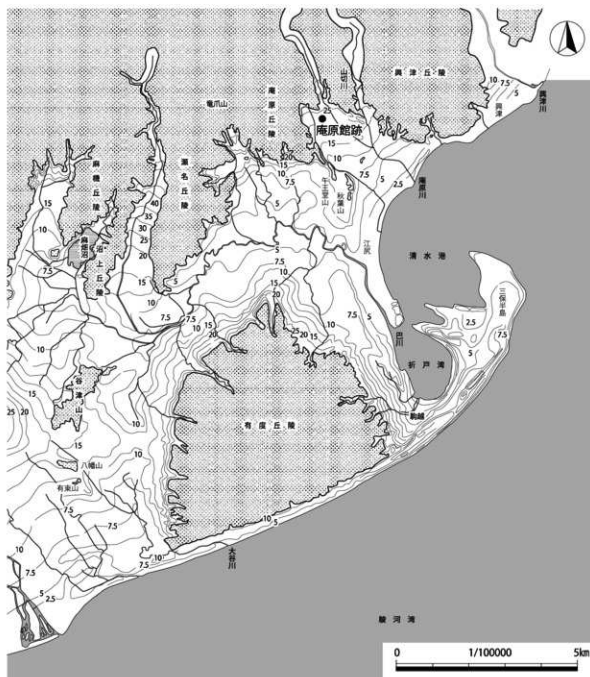
静岡市内では縄文時代から近世までの遺跡が数多く確認されており、先史時代から人々が生活を営んでいた様子を垣間見ることが出来る。更新世から完新世に移行すると、汎り島的に温暖化による海水面の上昇が見られるようになる。俗に「縄文海進」と称される現象である。海水面は縄文時代前期頃まで上昇し、最高位は現在より平均3m程高まったと言われている。麻機低地付近までの浸水が想定されており、この内海を古折戸湾と称することもある。標高が低い清水平野にも海水が流入したと考えられ、その後徐々に海退が進行し、その跡地が陸化する弥生時代に至ると清水平野の諸所で稲作が開始されるようになる。

古墳時代になると、午玉堂山や庵原丘陵上に古墳群が築造されるようになる。当該地域は『倭名類聚抄』に記される駿河国蘆原郡蘆原郷に相当し、これらの古墳群は『日本書紀』に見られる蘆原君一族のものと推定されている。6世紀に入り、国造制が敷かれるようになると、『先代旧事本紀』中の『国造本紀』に記載された静岡県内の6国造の中に「蘆原国造」の名があり、成務天皇の御代に吉備武彦命の子である思加部武彦命が国造を嗣ったとされている。また、『日本書紀』にはその子孫である蘆原君臣が、天智2年（663年）の白村江の戦いに援軍を率いて参戦したという記載があり、6～7世紀にかけて本

調査地点周辺（庵原地区）では有力豪族が台頭し、庵原地区は政治的中心地であった様子が窺える。

奈良・平安時代になると、畿内と常陸を結ぶ古代東海道が整備された。このことは県内の発掘調査でも明らかにされており、道路延長線上にある静岡・清水平野には、古代東海道駅路を基軸とした条里制地割が展開していたことも判明している。

中世に入ると、庵原地区では庵原氏、三保地区では入江氏が勃興し、その他多くの武士集団が各地で台頭した。庵原氏の名前は今なお地名として残り、入江氏もまた在地領主となり、入江の地は入江荘と呼ばれるようになった。その後も入江氏からは、息津（興津）・由比・蒲原氏など現地名に残る多くの豪族が輩出され、入江宗家は一族の長として権勢を振るっていった。



第2図 周辺地形図

第3節 周辺の主な遺跡

本遺跡の所在する清水平野における遺跡の分布状況を概観すると、微高地上に生活の場を求めていたようであり、その他、低地を分かち丘陵地にも生活の場が展開されている。先述のとおり、静岡市内では縄文時代から近世までの遺跡が数多く確認されているが、本節では本調査地点で確認された弥生時代から中世にかけての遺跡に絞る、その概要について述べていきたい（第3図・第1表）。

弥生時代

弥生時代になると生業との関わりから集落は低地に進出し、遺跡が濃密に分布ようになる。有度丘陵を挟んで西に位置する静岡平野に所在する登呂遺跡は、日本で初めて水田遺構が学術的に発掘調査され、国指定特別史跡に指定された弥生時代後期を代表する遺跡である。清水平野からは、本遺跡（第2次）の他、西駿河地域中期中葉の土器型式「原添式土器」の標識遺跡である原添Ⅲ遺跡（72）等で弥生時代中期の遺物が少なからず出土しているが、当該期にかかる水田遺構は未だ確認されていない。清水区袖師に所在する上嶺遺跡（50）からは弥生時代中期後葉の住居跡及び環濠と想定される遺構が検出されている。また、清水平野の西端を流下する塩田川左岸に形成された自然堤防上に立地する能島遺跡からは、弥生時代中期後半の方形周溝墓27基が検出され、注目される。

後期に入ると、西駿河地域後期後半の土器型式「飯田式土器」の標識遺跡である飯田遺跡（67・68）が庵原丘陵縁辺の扇状地に確認される。本遺跡の南に位置する一丁田遺跡（42）では当該期の水田遺構が検出され、近隣の微高地上に集落が展開していた可能性が想定されている。本遺跡東側の丘陵部に立地する原平遺跡（21）からは後期中葉の土器がまとまって出土しており、その候補地と言えよう。

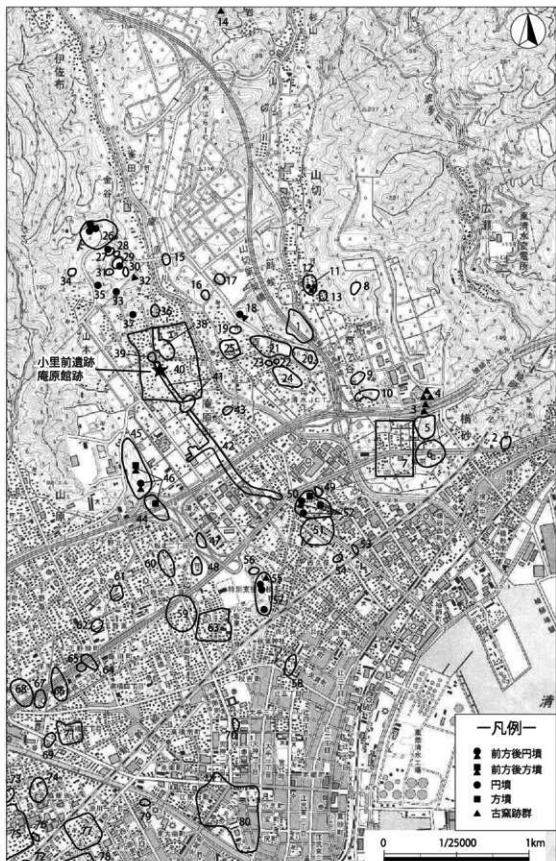
古墳時代

古墳時代になると庵原丘陵や午王堂山・秋葉山などの独立丘陵上に数多くの古墳群が築造される。その中で最古の前期前半に位置付けられるのが、本遺跡の南東約1.3kmに位置する神明山1号墳（52）である。当古墳は墳丘長69mの前方後円墳で、奈良県桜井市に所在する箸墓古墳の1/4サイズで設計されており、定型化した前方後円墳としては東日本最古段階に位置付けられる。庵原地区ではその後も首長墳と考えられる大型古墳が連綿と築造され、前期中葉に本遺跡の南西丘陵上に午王堂山3号墳（46）、前期後葉に午王堂山1号墳（46）が築造された。午王堂山3号墳は墳丘長77.6mの前方後円墳で、後方部頂の粘土槨から三角縁四神四獣鏡が1面出土した。午王堂山1号墳は墳丘長40～50mの前方後円墳と想定され、後円部頂で検出された木炭槨から獣形鏡や玉類、武器類などが出土している。次いで前期末には本遺跡の東側丘陵上に三池平古墳（18）が築造された。同古墳は墳丘長67mの前方後円墳で、後円部頂の割竹形石棺を納めた埋葬施設内から変形方格規矩四神鏡・四獣文鏡の他、石銅、鉄製武器類などの豊富な副葬品が出土している。割竹形石棺は東日本では稀有な埋葬施設であり、その背景に畿内政権との交流が想定される。

その後、中期に入ると大型古墳の築造は静岡平野へ移行し、庵原地区での造墓活動は縮小するが、後期後半には再び、東久佐奈岐古墳群（11）・薬師平古墳群（26）・丸山古墳群（27）・塔作古墳群（29）・秋葉山古墳群（57）などの小円墳を主体とする古墳群が庵原丘陵縁辺部に築造された。

飛鳥時代

飛鳥・白鳳時代になると、本遺跡の南東東1.7kmに位置する興津丘陵の先端部に尾羽廢寺跡（7）が



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種別
1	庵原城跡	室町	山城
2	渡船遺跡	平安	古墳地
3	東山田古窯跡群	飛鳥～奈良	古墳地
4	東山田古窯跡群	飛鳥～奈良	窯跡
5	尾羽山古墳群	古墳	古墳地
6	山ノ鼻遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
7	尾羽山古墳群	古墳	古墳地
8	夕日講堂跡	古墳	古墳地
9	若宮遺跡	鎌倉	古墳地
10	上平遺跡	鎌倉	古墳地
11	宮内省古墳群	飛鳥・古墳	古墳地
12	宮内省遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
13	宮内省遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
14	杉山跡	鎌倉	古墳地
15	宮内省遺跡	鎌倉	古墳地
16	宮内省遺跡	鎌倉・古墳	古墳地
17	宮内省遺跡	鎌倉	古墳地
18	三ツ平古墳	古墳	古墳地
19	三ツ平遺跡	古墳	古墳地
20	大東寺遺跡	山形・鎌倉・古墳・中世	集落跡
21	上平遺跡	鎌倉・古墳	古墳地
22	山田遺跡	鎌倉・古墳	古墳地
23	山田遺跡	鎌倉	古墳地
24	東山田遺跡	鎌倉・古墳	古墳地
25	大子結遺跡	古墳	古墳地
26	藤原寺遺跡	古墳	古墳地
27	山田遺跡	古墳	古墳地
28	所作遺跡	鎌倉・中世・近世	集落跡
29	所作古墳群	古墳	古墳地
30	所ノ後遺跡	鎌倉	古墳地
31	所ノ後遺跡	鎌倉	古墳地
32	寺山遺跡	平安	窯跡
33	寺山古墳群	古墳	古墳地
34	大東寺遺跡	鎌倉	古墳地
35	所ノ後遺跡	鎌倉	古墳地
36	上野屋遺跡	平安	古墳地
37	大東寺遺跡	古墳	古墳地
38	所ノ後遺跡	古墳・平安・中世	集落跡
39	大東寺遺跡	古墳	古墳地
40	庵原城跡	平安～室町	跡跡

番号	遺跡名	時代	種別
41	小野原遺跡	飛鳥～平安	集落跡
42	一丁田遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
43	山田遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
44	所ノ後遺跡	鎌倉・平安	集落跡
45	所ノ後遺跡	山形・古墳	古墳地
46	所ノ後遺跡	古墳	古墳地
47	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
48	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
49	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
50	所ノ後遺跡	鎌倉・平安	集落跡
51	所ノ後遺跡	鎌倉・古墳	古墳地
52	所ノ後遺跡	古墳	古墳地
53	所ノ後遺跡	古墳	古墳地
54	所ノ後遺跡	古墳	古墳地
55	所ノ後遺跡	古墳	古墳地
56	所ノ後遺跡	古墳	古墳地
57	所ノ後遺跡	古墳	古墳地
58	所ノ後遺跡	古墳	古墳地
59	所ノ後遺跡	鎌倉・鎌倉	古墳地
60	大田町遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
61	大田町遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
62	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
63	所ノ後遺跡	鎌倉	古墳地
64	下野遺跡 (A地区)	飛鳥・古墳	古墳地
65	下野遺跡 (B地区)	鎌倉	古墳地
66	下野遺跡 (C地区)	飛鳥・古墳	古墳地
67	所ノ後遺跡 (久米山地区)	飛鳥・鎌倉	古墳地
70	一木山遺跡	古墳	古墳地
71	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
72	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
73	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
74	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
75	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
76	所ノ後遺跡	飛鳥・古墳	古墳地
77	所ノ後遺跡	鎌倉	古墳地
78	所ノ後遺跡	鎌倉	古墳地
79	所ノ後遺跡	鎌倉・古墳	古墳地
80	所ノ後遺跡	鎌倉	古墳地

建立された。金堂や講堂、中門等が確認されており、川原寺系の八葉複弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦が出土している。これらの瓦は、尾羽庵寺跡の北東側に隣接する東山田古窯跡群（4）から供給されたものである。飛鳥四大寺の一つである川原寺と同系統の瓦が用いられていることから、尾羽庵寺跡周辺は蘆原郡衙の有力比定地とされている。

奈良・平安時代

先述の通り、本遺跡の所在する庵原地区は、『倭名類聚抄』に記される駿河国蘆原郡蘆原郷に相当する。安易に古墳時代の政治領域と古代の律令制度領域を結び付けることはできないが、古墳時代前期を通じて大型古墳が連綿と築かれた庵原地区は、尾羽庵寺跡周辺の尾羽地区と同様に蘆原郡衙の有力比定地と考えられている。庵原地区ではこれまで当該期の集落跡はほとんど確認されていなかったが、平成26年から行われた本遺跡の第1・2次調査において、8～10世紀の鍛冶工房を伴う集落跡が確認され、墨書土器や鈎帯金具が出土したことから、本遺跡周辺に蘆原郡衙が存在していた可能性が高まった。

中世

室町時代になると、本遺跡の東1.0kmに位置する興津丘陵に庵原城跡（1）が築造される。掘立柱建物跡の他、曲輪、堀切などが確認され、鎌倉時代の白磁・青磁や室町時代の古瀬戸・常滑・信楽・志戸呂などが出土した。庵原城跡は庵原氏が築造した山城であり、本調査地点に比定される庵原館跡と密接な繋がりを有している。庵原氏は平安時代末から室町時代にかけての地方豪族で、戦国大名今川氏の家臣の一人である。庵原館跡はその居館跡と考えられ、「小屋敷」等の小字名にその存在を残しているものの、これまでに建物跡や堀跡等の遺構は全く確認されておらず、今回の調査においても居館の存在を示唆する資料は得られなかった。

第3章 調査経過

第1節 調査区の設定と調査経過

平成29年7月11日から現場作業を開始し、調査区設定、発掘資機材等の搬入及び安全柵の設置を行い、7月19日から重機による土上掘削と排土場外搬出を開始した。調査区設定に際し、当初の設計では清水富士宮線道路の敷設範囲に即した南北長30.0m、東西長16.0mの長方形区画を予定していたが、排土搬出経路を確保出来なかったため協議を行い、その結果、北東隅を隅切りし、隅切り分を北側に拡張する形で調査区の形状を変更した。

調査面積は調査区上端で480mを測るが、遺構検出面までの掘削深度が深く、安全上の見地から約45°の法面勾配を付け、重機による掘削を行った。表土層、礫層（Ⅰ・Ⅱ層）を除去し、現地表面から2.1~2.3m下層において明黄褐色砂層（Ⅲ層）に達したので、その面で人力により掘削作業に切り替え、精査・遺構検出作業を行った。

調査範囲全域に世界測地系平面直角座標第Ⅷ系に則して、1区画10m×10mのグリッドを設定し、遺構の位置関係・表示、包含層遺物の取上げに用いた。グリッドの基点は、本調査と同一の調査原因である一丁田遺跡（1区）の調査時に設定した「X=106,300m、Y=1,560m」を踏襲し、名称は南北軸が南から北へ1、2…96、東西軸が東から西へA・B…AA…CDとし、これらを組合せて、CD-96、CB-93グリッド等と呼称することにした（第4・5図）。

7月25日に重機による土上掘削と排土場外搬出が終了し、7月26日に攪乱中に含まれていた産廃の搬出を行った。7月28日に昇降階段を南壁・東壁沿いの2カ所に設置し、7月31日から基本層序と遺構検出の把握を主目的に、排水溝も兼ねた外周トレンチ（幅0.6m）の人力掘削を開始した。

外周トレンチの掘削は自然堆積層である砂礫層（Ⅷ層）まで行い、8月4日に終了した。台風5号の影響による中断期間を経て、8月8日から第1面遺構（平安時代末～中世面）の検出作業を開始した。第1面遺構の検出はⅢ層を人力掘削で面下げし、Ⅳ層上面で行った。なお、Ⅳ層は地点によって層厚に多寡があり、一部でⅤ-Ⅰ層が露出している状況であった。その後、8月17日にローリングタワー及びドローンによる全景写真撮影・写真測量を行い、第1面の調査が終了した。

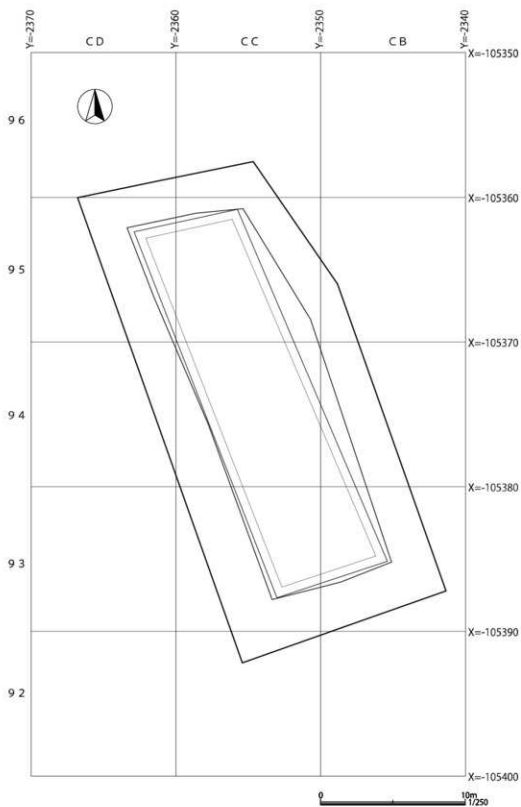
8月18日から人力による第2面（奈良・平安時代面）への面下げを開始した。8月21日に調査区南側脇に仮置きしていた排土の場外搬出を行い、これ以降、排土置場の状況に応じて適宜、排土の場外搬出を行った。8月23日から開始した第2面遺構の検出は、第2次調査の例に倣い、Ⅴ-Ⅰ層を除去し、Ⅴ-2層上面で行った。結果、Ⅴ-2層は河川氾濫による影響で地点ごとで層序が安定しておらず、Ⅴ-2層上面を生活面として捉えることは不可能であったため、8月28日に補足資料としてドローンによる全景写真撮影と地形測量を行った後、同日Ⅴ-2層以下への面下げを開始した。

面下げを進めていく中、9月8日にⅥ層に差し掛かった時点で竪穴住居跡（1・2・4号住居跡）を検出したため、Ⅵ層上面で調査区全域の精査を行い、再度、第2面遺構（奈良・平安時代面）の検出作業を行った。その結果、竪穴住居跡4軒、ビット8基を検出した。Ⅵ層の層厚は薄く、調査区北側の一部ではⅧ層（自然堆積層）、調査区南側はほぼ全面でⅦ層が露出している状況であった。よって、第2面は調査区北側ではⅥ層上面、調査区南側ではⅥ～Ⅶ層上面というやや不均一な状況であった。

9月14日から第2面遺構調査を開始したが、9月後半以降は度重なる台風襲来と秋雨前線の停滞により調査の遅延を余儀なくされた。特に台風21号（10月21日～25日）、台風22号（10月29日～30



第4図 調査区配置図



第 5 図 グリッド配置図

日)による被害は甚大で、掘削途中であった竪穴住居跡の形状と床面の把握を非常に困難なものとした。

その後、11月2日に第2面全景写真撮影、11月6日に調査区壁面の基本層序記録作業を終了させ、11月7日の出土遺物搬出をもって、現場作業は終了した。なお、安全柵に関しては監督員との協議の上、一旦残置し、清水富士宮線道路の工事準備が整った12月21日に撤去作業を行った。

整理作業は、出土遺物の洗浄など一部の作業を現場作業と並行して行っていたが、11月8日から本格的に開始し、平成30年3月28日の報告書刊行をもって終了した。

第2節 調査方法

遺構の調査にあたって、竪穴住居跡は主軸方向に合わせて十字ベルトを設定し、ピットは概ね長軸方向に半載し、土層堆積状況を観察記録した後に完掘した。出土遺物は出土層位・出土位置に応じて、区分して取り上げた。また、個体土器や大形の破片が集中している場合は遺物出土状況図を作成した。なお、これらの記録作業はトータルステーションによる座標記録・図化と、ドローンによる写真測量を併用して行った。

遺構番号は、検出段階で遺構種別ごとに1号から順に連番を付した。写真による記録はデジタルカメラ(1200万画素)と35mmカメラ(リバーサルフィルム)を使用し、全景写真撮影等には中判カメラ(6×7モノクロ・リバーサルフィルム)も使用し、遺構検出状況、土層堆積状況、完掘状況や工程進捗等を適宜撮影した。

整理作業については、遺構図面は基礎整理の後に、遺構ごとに平面・断面図を整合させて作成した。その後に編集加工・デジタルトレースを経て、報告書用図版を作成した。出土遺物は、洗浄・注記・接合・復元、時代別・型式別分類、計量作業等を行った後、実測個体を抽出した。抽出した遺物は監督員による確認作業を経て、実測、デジタルトレース、観察表作成を行い、遺構ごとに本文中に掲載した。同時に原稿執筆、出土遺物の写真撮影及び加工作業を行い、報告書編集作業を行った。

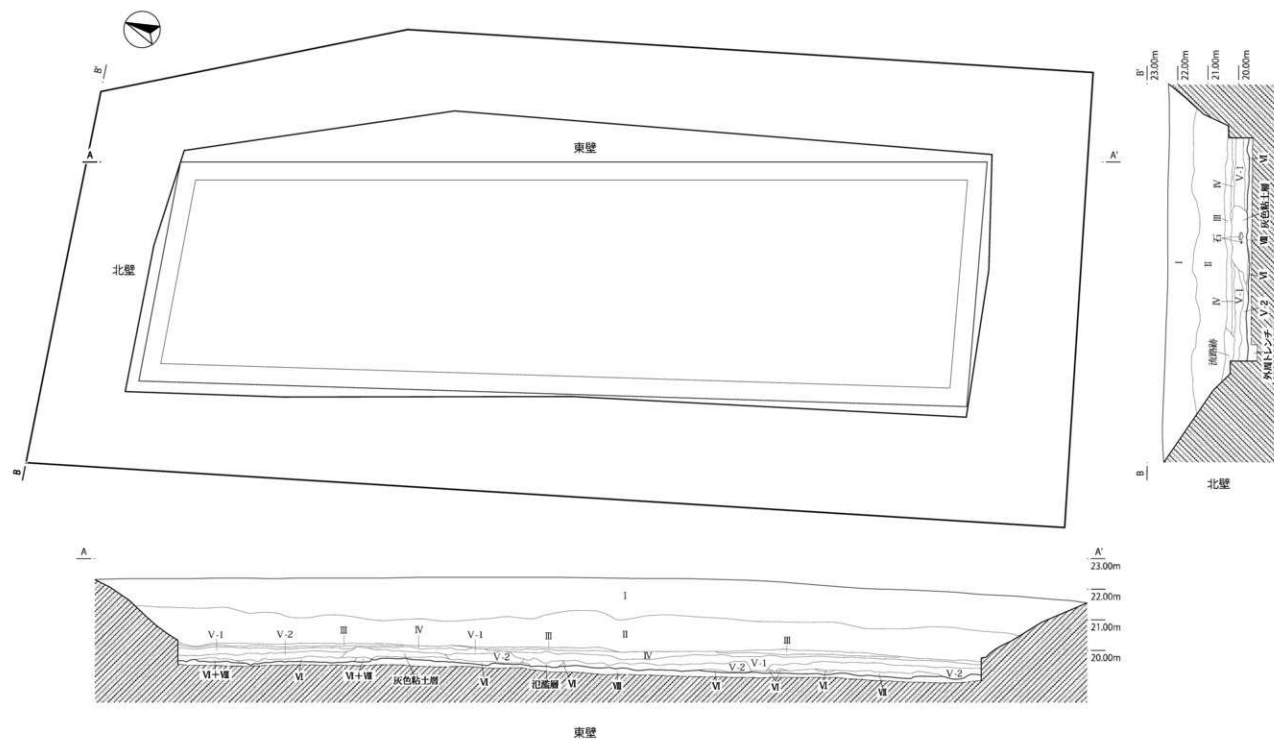
第4章 基本層序

調査地には家屋が建っており、家屋解体後に廃材・ゴミ等を埋め戻し、盛土整形をしていた。そのため、表土層（Ⅰ層）の層厚は厚く、多くの産廃を含んでいた。Ⅱ層は地点によっては層厚が1.5m以上に及ぶが、総じて締まりが弱く、壁面養生シートで覆っていても豪雨・台風時には絶えず崩落し、調査に影響を及ぼした。Ⅲ・Ⅳ層からは層厚に比例して遺物はほとんど出土しなかったが、層厚が比較的厚いⅤ-Ⅰ・Ⅴ-Ⅱ層は多くの遺物を包含する。同層の一部は遺構覆土である可能性が考えられるが、河川氾濫の影響で層序が安定しておらず、遺構覆土と基盤層の分別は困難であったため、遺物包含層として取り扱った。

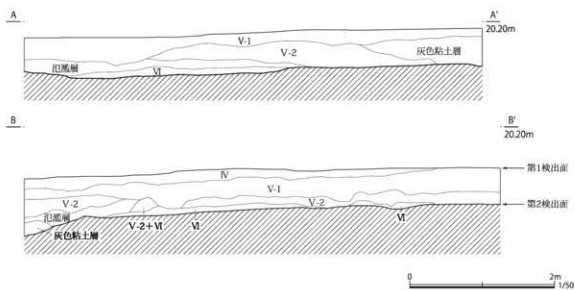
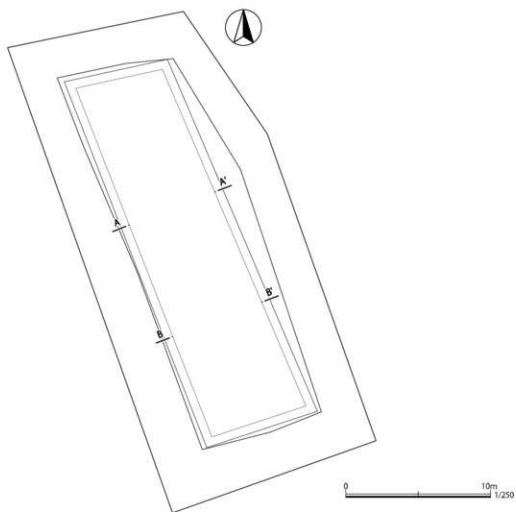
原則としてⅣ層上面を第1検出面、Ⅵ・Ⅶ層上面を第2検出面と捉え、層位的な調査を心掛けた。基本層序の確認は、調査区北・東壁および、グリッド杭を基点に調査区東西軸に平行して設定した土層観察ベルトで行った（第6・7図）。その他に、南・西壁において住居跡が掛かる箇所についても記録作業を行った（第16・19図）。

各層位の詳細は以下の通りで、Ⅰ層～Ⅴ-Ⅱ層は本調査地点の南側に近接する第2次調査の基本層序に概ね準拠し、Ⅵ・Ⅶ層は新規に設定した。Ⅷ層は自然堆積層で、第2次調査Ⅵ層と同一層である。

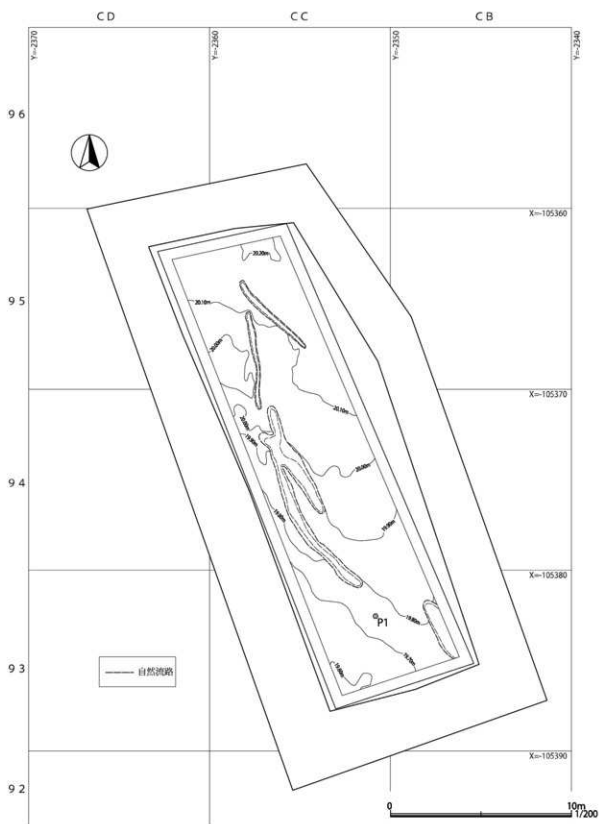
- | | |
|------|--|
| Ⅰ層 | 表土
現代の盛土・耕作土。碎石等が認められる。 |
| Ⅱ層 | 礫層
拳大～人頭大の礫が密集して堆積する。河川氾濫に由来する層で、総じて締まりは弱い。 |
| Ⅲ層 | 明黄褐色砂層（2.5Y7/6）
粘性・締まり弱。遺物はほとんど含まれない。 |
| Ⅳ層 | 灰黄褐色シルト層（10YR6/2）
第1検出面。粘性あり、締まりやや弱。遺物はほとんど含まれない。 |
| Ⅴ-Ⅰ層 | 黒褐色シルト層（10YR3/2）
粘性・締まりあり。小礫・炭化物を少量含む。遺物を多く包含する |
| Ⅴ-Ⅱ層 | 黒褐色シルト層（7.5YR3/1）
粘性あり、締まりやや弱。礫・小礫（Ⅴ-Ⅰ層より大型）を中量含む。遺物を多く包含し、河川氾濫に由来する礫層・粘土層が間層として混入する。 |
| Ⅵ層 | 灰褐色砂質シルト層（7.5YR4/2）
第2検出面（調査区北側）。粘性やや弱・締まりあり。 |
| Ⅶ層 | 灰黄褐色粘土質シルト層（10YR5/2）
第2検出面（調査区南側）。粘性・締まりやや強。小礫を多量含む。 |
| Ⅷ層 | 砂礫層（自然堆積層）
北から南に向かい、緩やかに傾斜する。礫の密度は地点によって多寡がみられる。 |



第6図 基本土層図①



第7図 基本土層図②



第8図 第1面遺構全体図

第5章 検出遺構と出土遺物

本遺跡は庵原丘陵から延びる微高地上に立地し、地形は北から南に向かって緩やかに傾斜する。複数面各所で河川氾濫の痕跡が認められ、そのために遺構密度は低く、遺物も流れ込みによるものが大多数を占める。検出面の策定も容易ではなかったが、これまでの調査成果と外周トレンチ壁面の土層堆積状況を鑑みて、Ⅳ層上面を第1面（平安時代末～中世）、Ⅵ・Ⅶ層上面を第2面（奈良・平安時代）として捉え、各面ごとに調査を行った。

第1面で検出された遺構はビット1基、第2面で検出された遺構は竪穴住居跡4軒、ビット8基である。その他に遺物包含層及び遺構外から、流れ込みと考えられる弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺物が出土した。以下、時代順に詳細を述べていく。

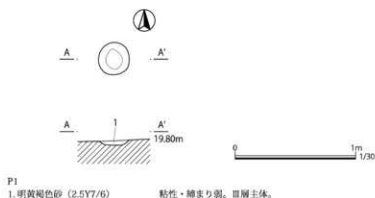
第1節 平安時代末～中世（第1面）

（1）ビット

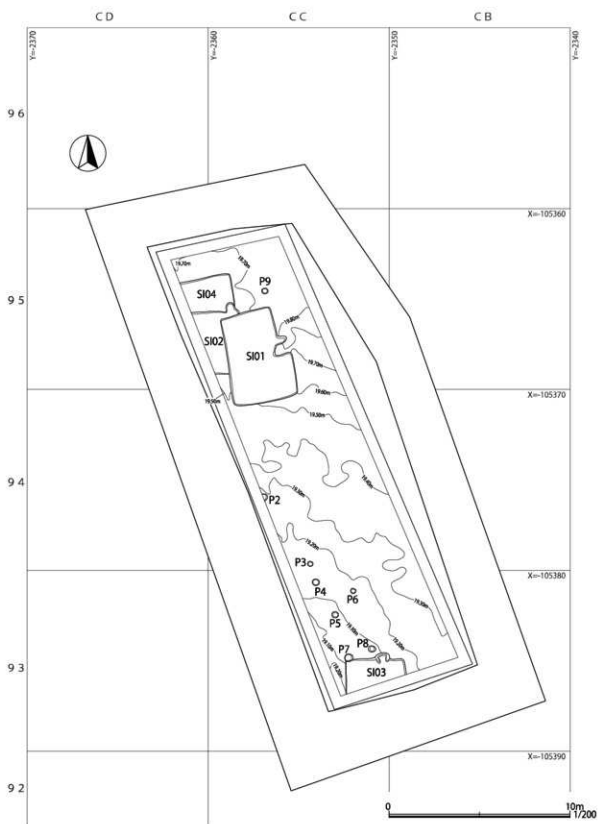
当該期の遺構として、ビット1基（1号ビット）が検出された（第8・9図）。遺物は出土していないが、検出面と覆土の特徴から、帰属時期は平安時代末～中世と考えられる。規模など詳細はビット計測表（第2表）を参照されたい。

第2表 ビット計測表①

遺構名	グリッド	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	覆土
1号ビット	C C-93	円形	0.26	0.26	0.04	Ⅲ層主体



第9図 1号ビット実測図



第10図 第2面遺構全体図

第2節 奈良・平安時代(第2面)

当該期の遺構として、竪穴住居跡4軒、ピット8基が検出された(第10図)。帰属時期は、奈良時代後半から平安時代前半(8世紀後葉～9世紀後葉)と考えられる。

(1) 竪穴住居跡

4軒が検出され、その内3軒は重複する。遺構密度は低く、大きく北群3軒(1・2・4号住居跡)と南群1軒(3号住居跡)の2群に分かれて点在し、両群の間には約15mの隔りがある(第10図)。狭小な調査区であるため、全形を捉えられたのは1軒のみである。2・4号住居跡は概ね主軸方向が合致するが、それ以外に明確な配置の規則性は認められない。

1号竪穴住居跡(第11・12図 図版4)

位置: CC-94・95 グリッドに位置する。**遺構状況:**—

重複関係: 2号竪穴住居跡を切る。

平面形状: 長方形 **規模:** 長軸 5.15 m×短軸 3.62 m、深度 0.09～0.37 m

主軸方位: N-78°-E

覆土: 黒褐色シルトを主体に9層に分層される。大部分が人為的に埋め戻されたと考えられるが、カマド周辺、北壁沿いなど一部に北・東側からの流れ込みを想起させる堆積が認められる。

付帯施設: 床面は自然堆積層(Ⅶ層)を掘り込んだ直床と考えられるが、調査中の度重なる台風が呼水となった著しい湧水の影響で地盤が隆起してしまい、判然としない。東壁沿い中央やや北寄りにカマドが敷設され、煙道部は比較的長く東方向に伸びる。カマド袖はⅥ・Ⅶ層を掘り残す形で南側にのみ設けられる。掘り方は確認されず、カマド以外に柱穴・周溝等の付帯施設は検出されなかった。

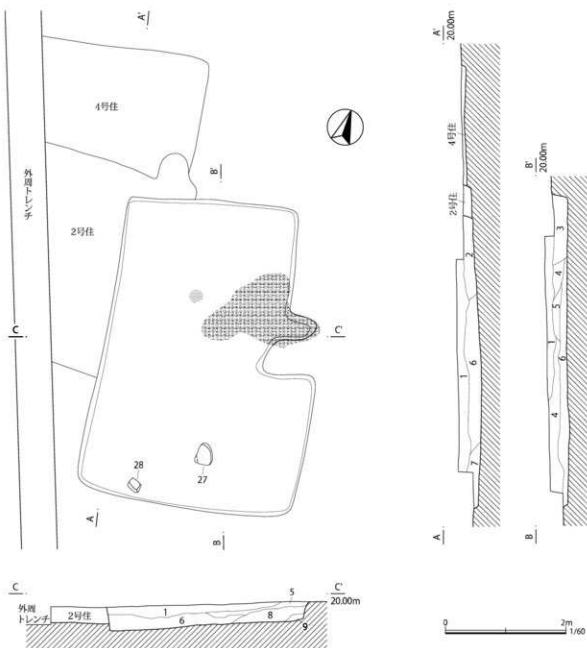
観察所見: カマド煙道部から南側袖を避ける形で住居内に焼土が流れ込む状況が確認された。南側袖と対になるカマド北側脇に広がりが見られることから、北側袖が確認されなかったこととの関連性が窺える。床面南西隅からカマド袖の芯材であった可能性がある被熱した台石が出土しており、河川氾濫等の要因でカマドの一部が破壊された可能性が考えられる。

時期: 出土遺物と他の住居跡との重複関係から9世紀後葉と考えられる。

出土遺物(第13～15図 第3表 図版6・7)

土器: 出土した灰釉陶器・須恵器・土師器の内26点を図示する。1～3は灰釉陶器である。1は広縁の段皿で、内面全面に漬掛けによる施釉が施される。2は皿で、刷毛塗りにより内面に薄く施釉が施される。3は碗である。三日月高台で、内面広範囲に降灰釉の付着が認められる。1・3は猿投窯産でK90号窯式(9世紀後半)に、2は宮口窯産でK90号窯式併行(9世紀後半)に位置付けられる。

4～9は須恵器である。4・5は蓋で、4は覆宝珠形の摘み部が残存する。6・7は坏で、6の底部は回転糸切後無調整で、体部外面に指紋痕が残る。7は灰釉陶器と同質の胎土で、非常に精緻な作りとなっている。8・9は甕で、共に外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が認められるが、タタキ具の形状及び内面調整には差異があり、8は上半部のみ当て具痕を回転ヘラ削りによって消しているのに対し、9はほとんど見えなくなるまで当て具痕

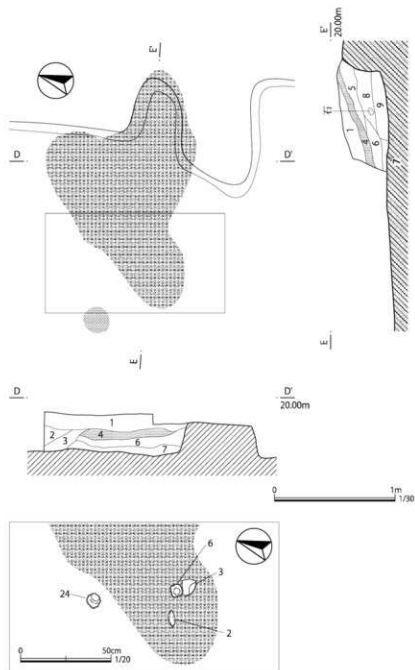


1号竪穴住居跡

1. 黒褐色シルト (10YR3/1)
2. 黒褐色シルト (7.5YR3/1)
3. 褐色砂質シルト (10YR4/4)
4. 黒褐色シルト (10YR3/2)
5. 黒褐色シルト (7.5YR3/2)
6. 黒褐色シルト (10YR3/1)
7. 黒褐色粘土質シルト (7.5YR2/2)
8. 褐色シルト (5YR4/1)
9. 黒褐色シルト (10YR3/1)

- 粘性あり、締まりやや強。礫・小礫中量、炭化物 (Φ 1-3mm) 微量含む。
- 粘性あり、締まりやや強。礫・小礫中量、Ⅴ層土ブロック (Φ 3-5mm) 少量含む。
- 粘性やや弱、締まりやや強。礫少量、Ⅴ層土ブロック (Φ 3-5mm) 多量含む。
- 粘性・締まりあり。礫・小礫少量、炭化物 (Φ 1-3mm) 少量含む。
- 粘性やや強、締まりあり。焼土ブロック・炭化物 (Φ 3-7mm) 中量含む。
- 粘性・締まりあり。礫・小礫中量、焼土ブロック (Φ 1-3mm) 微量、炭化物 (Φ 1-3mm) 少量含む。
- 粘性・締まりやや強。礫・小礫多量、Ⅴ層土ブロック (Φ 3-5mm) 少量含む。
- 粘性・締まりあり。焼土ブロック (Φ 2-5mm) 多量、小礫少量含む。
- 粘性やや強、締まりあり。小礫少量、焼土ブロック (Φ 1-3mm)・炭化物 (Φ 1-3mm) 微量含む。

第 11 図 1号竪穴住居跡実測図

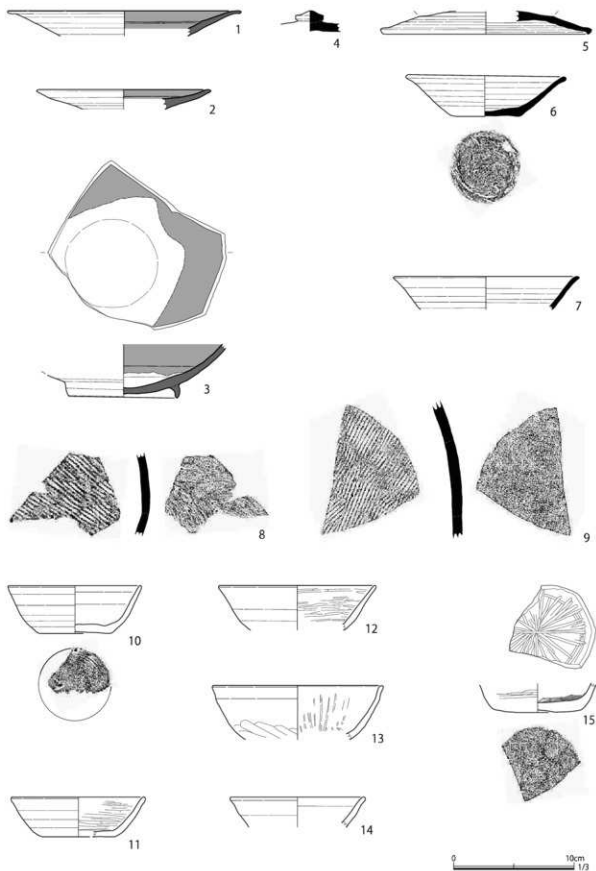


1号竪穴住居跡カマド

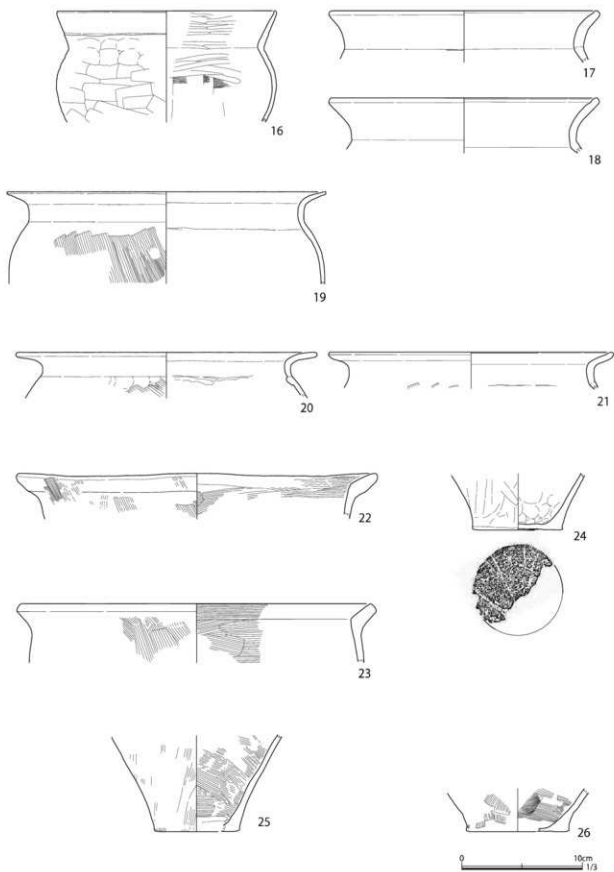
1. 赤灰色シルト (2.5YR4/1)
2. 褐色シルト (10YR4/1)
3. 灰黄褐色シルト (10YR5/2)
4. 明黄褐色シルト (2.5YR5/6)
5. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
6. 褐色シルト (5YR4/1)
7. 黒褐色シルト (10YR3/1)
8. 暗赤褐色粘土質シルト (5YR3/2)
9. オリーブ黒色粘土質シルト (5Y3/2)

粘性・締まりあり。小礫中量、焼土ブロック (Φ 2-5mm) 多量、炭化物 (Φ 1-3mm) 少量含む。
 粘性やや強、締まりあり。小礫少量含む。
 粘性あり、締まりやや強。焼土ブロック (Φ 1-4mm)・炭化物 (Φ 1-3mm) 少量含む。
 粘性やや弱、締まりあり。焼土主体層。小礫少量含む。
 粘性・締まりやや強。小礫多量、焼土ブロック (Φ 1-3mm) 少量含む。
 粘性・締まりあり。焼土ブロック (Φ 2-5mm) 多量、小礫少量含む。
 粘性やや強、締まりあり。小礫少量、焼土ブロック (Φ 1-3mm)・炭化物 (Φ 1-3mm) 微量含む。
 粘性・締まりやや強。焼土ブロック (Φ 1-3mm) 少量、礫中量含む。
 粘性強、締まりあり。焼土ブロック (Φ 2-5mm) 少量、小礫中量含む。

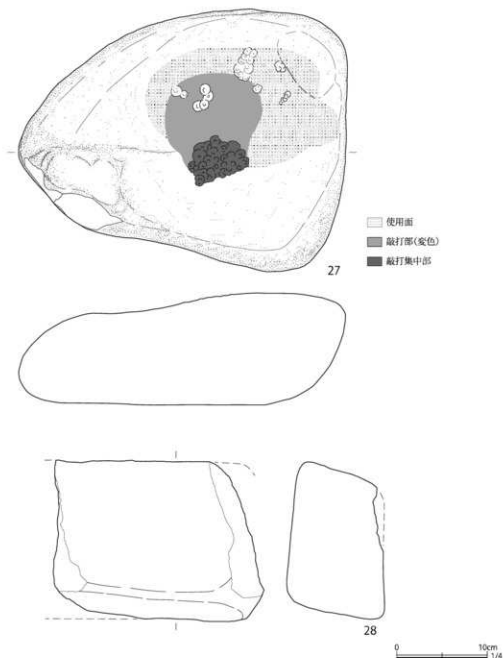
第12図 1号竪穴住居跡カマド実測図



第 13 图 1 号竖穴住居跡出土遺物①



第 14 图 1 号竖穴住居跡出土遺物②



第 15 図 1号竪穴住居跡出土遺物③

がナデ消されている。4は秋葉山窯跡群産で8世紀中葉、5・6は駿河在地窯産で8世紀後半、7は宮口窯産で9世紀後半、8は湖西窯産で8世紀前半、9は猿投窯産で9世紀後半にそれぞれ位置付けられる。

10～26は土師器である。10～15は坏で、系統不明の14以外は全て駿東型坏である。11・12は内面に横位ヘラミガキ、13・15は放射状ヘラミガキ（暗文）が施され、13は駿東型坏の特徴の1つである体部下端外面への手持ちヘラケズリが認められる。15は底部内面に明瞭な放射状暗文が認められるほか、底部外面に井桁状の線刻が施されるなど特異な点が認められる。

第3表 1号竪穴住居跡出土遺物観察表

調査 番号	発見 品名	保存 部位	位置 (G)	数量 (個)	重量 (g)	形状・材質・用途・特徴	出土 状況	出土 層位	色澤	備考
1	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(19.3)	—	(2.1)	土曜 (外) コロコロ丸焼き成形 (内) コロコロ丸焼き成形、全面施釉(滑沢付)	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面 カマ下出土
2	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(14.0)	—	(1.6)	(外) コロコロ丸焼き成形 (内) コロコロ丸焼き成形、全面に施す(施釉(黒毛塗り))	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器口縁面
3	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	—	8.9	(4.0)	三日月型 (外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
4	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	—	—	(1.7)	三日月型 (外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
5	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(16.8)	—	(1.9)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
6	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(11.9)	5.2	3.5	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
7	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(15.0)	—	(2.7)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
8	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	—	—	(0.8)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
9	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	—	—	(10.8)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
10	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(10.8)	(6.0)	4.0	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
11	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(10.9)	(5.9)	3.3	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
12	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(12.8)	—	(3.7)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
13	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(13.5)	—	(4.5)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
14	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(10.9)	—	(2.5)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
15	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	—	(7.0)	(2.4)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
16	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(17.9)	—	(9.2)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
17	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(21.9)	—	(4.3)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
18	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(22.0)	—	(4.0)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
19	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(26.5)	—	(7.6)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
20	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(25.0)	—	(3.0)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
21	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(23.2)	—	(3.1)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
22	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(20.5)	—	(3.0)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
23	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	(28.9)	—	(1.8)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
24	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	—	7.4	(4.7)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
25	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	—	(7.0)	(8.0)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
26	灰釉陶器 片	1号竪穴住居跡	—	(8.5)	(3.6)	(外) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ (内) コロコロ丸焼き成形、器底下部に丸ヘラツリ	露出	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面

調査 番号	発見 品名	位置 (G)	数量 (個)	重量 (g)	形状・材質・用途・特徴	出土 状況	出土 層位	色澤	備考
27	石製品 台石	35.8	29.0	12.3	18,900	砂岩	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面
28	石製品 台石	(22.0)	(17.2)	10.7	7,200	砂岩	良好	表面: 灰白色 (2.577/1) 裏面: 灰白色	器底面

16～26は甕である。駿東型(16～18)・遠江型(19～21)・甲斐型(22～26)の3系統に分類され、他の器種に比して若干の時期幅が認められる。16は駿東型球胴甕で、胴部が長胴化する他の土器群より数段階古い様相を呈し、流れ込みと考えられる。17・18は口唇部内面が沈線状に肥厚する点は共通するが、時期差を反映し、口縁部の全体形状は大きく異なる。19～21は遠江型長胴甕である。いずれも口縁部が大きく水平方向に開くが、20はより屈曲が強く、新しい様相を呈する。

22～26は甲斐型長胴甕である。22・23は口径が広がり、口縁部の器厚が厚くなることから、同型式の中では新しい様相を呈する。22は口唇部に面を有し、その中でもやや新しい傾向が認められる。24～26は胴部～底部片で、いずれも底径の小さい底部から胴部が直線的に立ち上がり、ハケメ調整ないしはヘラナデにより器厚は薄く調整される。

石製品：2点が出土した。27・28は共に砂岩製の台石で、床面南西隅から比較的近接して出土した。27は上面にのみ敲打痕及び擦痕が認められ、敲打部は黒色に変色していることから使用頻度の高さが窺える。鉄分の付着こそ見られなかったが、隣接する第2次調査区から轡・鉄滓・砥石等の鍛冶関連遺物がまとまって出土していることから、金床石のような用途が想定される。28は破損面を除く4面全面が被熱し、その内上面を除く3面は随所が爆ぜるように剥落している。上下・側面に素材を角柱状に切り出して加工した痕跡が認められるが、それ以外に明瞭な使用痕は認められない。27との出土位置の相関関係から台石として報告するが、形状と被熱状況から、カマド袖の芯材ないしは、その転用品である可能性が考えられる。

2号竪穴住居跡(第16・17図 図版4)

位置：C・C・D-95グリッドに位置する。**遺構状況**：西側は調査区外に延びる。

重複関係：1号竪穴住居跡に切られ、4号竪穴住居跡を切る。

平面形状：方形 **規模**：長軸3.98m×短軸(2.64)m、深度0.13～0.28m

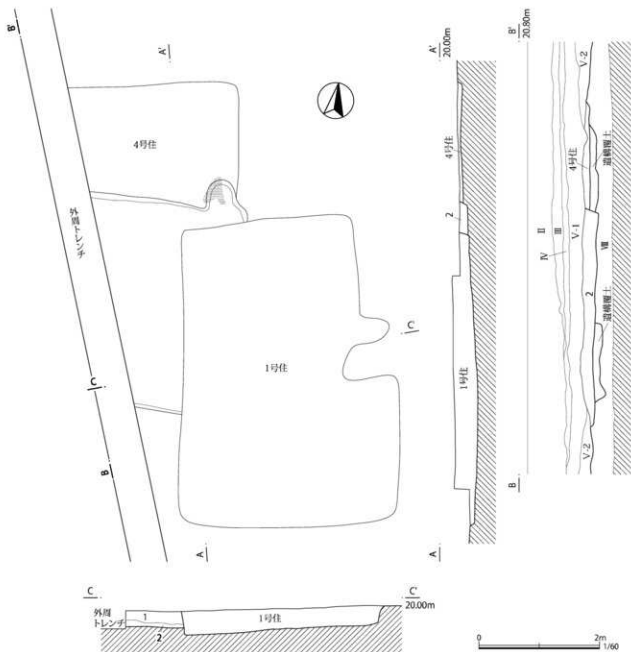
主軸方位：N-3°-W

覆土：黒褐色シルトを主体に2層に分層され、堆積状況から人為的に埋め戻されたと考えられる。

付帯施設：床面は自然堆積層(Ⅷ層)を掘り込んだ直床で、固く踏み締められる。北東隅壁沿いにカマドが敷設され、煙道部は北側に短く張り出す。袖は設けられていなかったが、東壁に沿う形で土師器甕の口縁部片が逆位で出土した。カマド以外に柱穴・周溝等の付帯施設は検出されなかった。

観察所見：カマド中軸線から概ね西側半分、北・西壁方向住居外に向かって、底面・壁面が被熱している状況が確認された。上部が大きく削平され、底面付近のみの検出であったが、比較的使用頻度が高かったことを窺わせる。焼土層を除去したところ、掘り方と考えられる浅い土坑状の不均一な掘り込みが確認された。

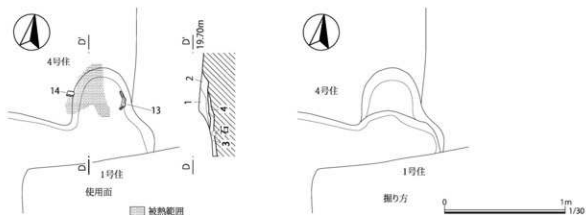
時期：出土遺物と他の住居跡との重複関係から9世紀前葉と考えられる。



2号竪穴住居跡

1. 黒褐色シルト (7.5YR3/1) 粘性あり、締まりやや強。礫・小礫少量含む。
2. 黒褐色シルト (7.5YR3/1) 粘性・締まりあり。礫・小礫中量、Ⅴ層土ブロック (Φ 1-3mm) 少量含む。

第 16 図 2 号竪穴住居跡実測図



2号住居穴跡カマド

1. 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性・締まりあり。小礫微量、焼土ブロック (Φ 3-7mm) 中量含む。
2. 灰黄褐色砂質シルト (10YR4/2) 粘性やや弱、締まりあり。小礫少量、焼土ブロック (Φ 3-5mm) 少量含む。
3. 黒褐色シルト (7.5YR3/1) 粘性・締まりあり。礫・小礫中量、焼土ブロック (Φ 3-5mm) 中量含む。
4. 褐灰色シルト (7.5YR4/1) 粘性・締まりあり。小礫中量、焼土ブロック (Φ 3-7mm) 多量含む。

第17図 2号竪穴住居跡カマド実測図

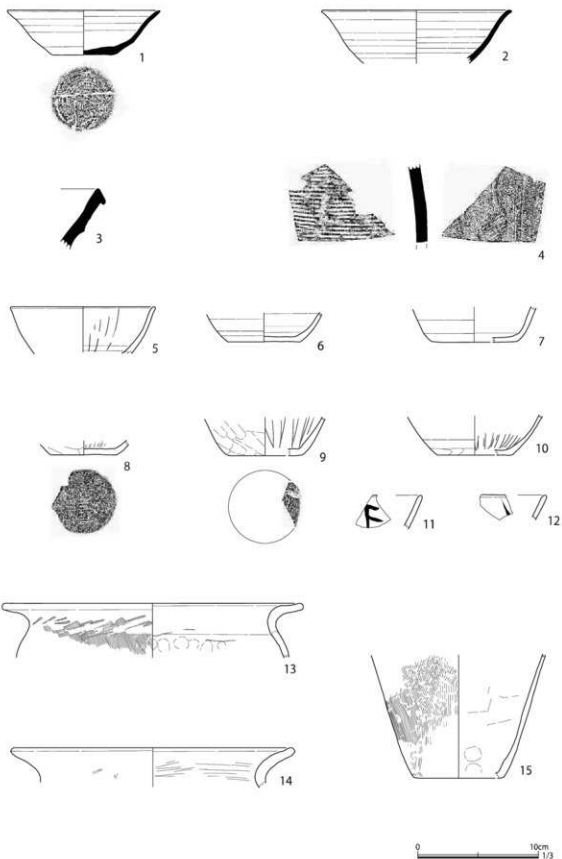
出土遺物 (第18図 第4表 図版8)

土 器：出土した須恵器・土師器の内15点を図示する。1～4は須恵器である。1・2は環で、1の底部は回転糸切り後無調整である。1号住居跡出土須恵器環 (第13図6) と同一の産地で、型式的にやや先行する。2は灰釉陶器と同質の胎土を用いて、非常に精緻な作りとなっている。1号住居跡出土須恵器環 (第13図7) と同一の産地と考えられ、立ち上がりがより鋭角的であることから型式的に先行する。3・4は甕である。1は駿河在地窯産で8世紀後半、2は宮口窯産で9世紀中葉、3・4は湖西産で8世紀前半にそれぞれ位置付けられる。

5～15は土師器である。5～12は環で、5～8は駿東型環、9・10は甲斐型環、11・12は小片のため系統不明である。5・8～10は内面に放射状ヘラミガキ (暗文) が施され、甲斐型環である9・10は特に精緻な調整が施される。駿東型環の内、底部が残存する6～8はいずれも底径の縮小化が進行しておらず、9世紀前半代の特徴を有する。8の底部は回転糸切り後に周縁のみ手持ちヘラケズリが施され、他の土器群と差異が見られる。

11・12は口縁部外面に墨書が施される。11は書字の一部しか残存していないが、正位ならば「下」、横位ならば「山」と判読され、則天文字である可能性も考えられる。12は墨痕のみで判読不能である。

13～15は遠江型長胴甕である。13は口縁部がほぼ水平方向に開くことから、14よりも新しい様相を呈する。13・15は共に外面に単位の非常に細かいソケメ調整が施され、15は特に器厚が薄く調整される。13・15は調整方法や胎土が類似しており、同一個体の可能性が考えられる。



第 18 图 2 号竖穴住居跡出土遺物

第4表 2号竪穴住居跡出土遺物観察表

調査 番号	発見 位置	発見 層位	数量 (個)	形状・大きさ・重量・色調の概要	出土 状況	色調	備考
1	竪穴居 跡	口縁部～底部 (12.5)	3.7 5.0	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 白色粉粒	外: 灰白色 (SY7/1) 内: 灰白色 (2.5Y8/1)	竪穴居跡 土層出土
2	竪穴居 跡	口縁部～底部 (15.2)	—	(外) 100ナデ (内) 100ナデ	黒色	良好 外: 灰白色 (2.5Y7/1) 内: 灰白色 (2.5Y7/1)	口縁部
3	竪穴居 跡	口縁部	—	(外) 100ナデ (内) 100ナデ	赤 灰石 (少)	良好 外: 灰白色 (2.5Y7/1) 内: 灰白色 (2.5Y7/1)	口縁部 内側面出土
4	竪穴居 跡	底部	—	(外) 100ナデ (内) 100ナデ	赤 白色粉粒、細砂粒	良 外: 灰白色 (2.5Y7/1) 内: 灰白色 (SY7/1)	底面出土
5	竪穴居 跡	口縁部～底部 (11.8)	—	(外) 100ナデ (内) 100ナデ	赤 赤色粉 (多)、灰石、白色粉 (少)	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
6	竪穴居 跡	底部～底面 (10.0)	2.4	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 赤色粉 (多)、灰石、白色粉 (少)	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
7	竪穴居 跡	底部～底面 (9.0)	2.9	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 赤色粉 (多)、灰石	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
8	竪穴居 跡	底部～底面 (8.4)	1.2	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 赤色粉 (多)、灰石、細砂粒	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
9	竪穴居 跡	底部～底面 (8.0)	3.2	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 赤色粉 (多)、白色粉粒	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
10	竪穴居 跡	底部～底面 (8.0)	3.3	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 赤色粉 (多)、灰石、細砂粒	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
11	竪穴居 跡	口縁部	—	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 石灰、白色粉粒	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
12	竪穴居 跡	口縁部	—	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 赤色粉、細砂粒	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
13	竪穴居 跡	口縁部～底部 (2.6)	—	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 赤色粉、細砂粒	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
14	竪穴居 跡	口縁部～底部 (2.3)	—	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 赤色粉 (多)、灰石、細砂粒	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居
15	竪穴居 跡	底部～底面 (7.4)	10.3	(外) 100ナデ、底面が板状の切り欠き状 (内) 100ナデ	赤 赤色粉 (多)、灰石	良 外: 赤色 (5Y8/6) 内: 赤色 (5Y8/6)	竪穴居

3号竪穴住居跡 (第19・20図 図版5)

位置: C・B・C-C-93グリッドに位置する。遺構状況: 南側は調査区外に延びる。

重複関係: 7号ピットに切られる。

平面形状: 方形 規模: 長軸 (2.21) m×短軸 3.31 m、深度 0.14～0.30 m

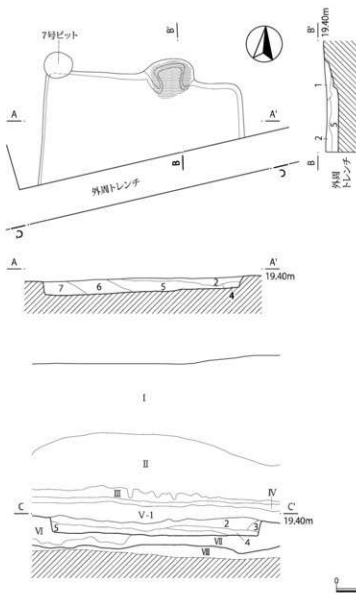
主軸方位: N-1°-W

覆土: 褐色シルト、灰褐色粘土質シルトを主体に10層に分層され、堆積状況から大部分は自然堆積 (流れ込み) と考えられる。

付帯施設: 床面はVI・VII層を掘り込んだ直床で、やや固く踏み締められている。北壁沿い中央やや東寄りにカマドが付設され、煙道部は北側にごく短く張り出す。東西に袖が設けられ、カマド掘り方はやや不整な土坑状を呈する。カマド以外に柱穴・周溝等の付帯施設は検出されなかった。

観察所見: 他の3軒が重複して検出されたのに対し、本住居跡のみ単独での検出となった。カマド全面が被熱している状況が確認されたが、焼土層の堆積は比較的薄く、使用頻度は余り高くなかったことを窺わせる。カマド燃焼部中央東壁寄りから、完形の小型炉が正位で1点出土した。口縁部～底部内面に油煙の付着が見られるが、煮沸具としてカマドで使用されていたとは考え難いことから儀礼的な用途が想定される。クロコ成形ではなく手づくね成形によることも、日常什器ではないことを窺わせる。

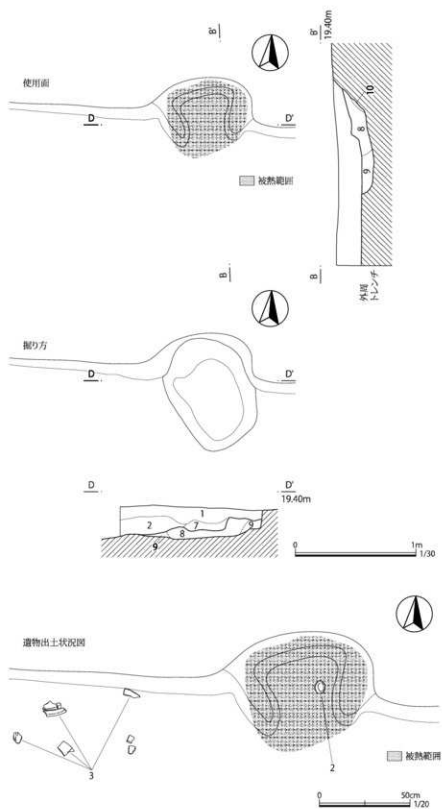
時期: 出土遺物と他の遺構との重複関係から8世紀後半～末葉と考えられる。



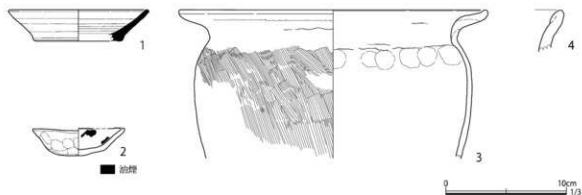
3号竪穴住居跡

1. 褐灰色シルト (7.5YR5/1) 粘性・締まりあり。焼土ブロック・炭化物 (Φ 3-5mm) 少量、Ⅴ層土ブロック (Φ 3-10mm) 少量含む。
2. 褐灰色シルト (7.5YR5/1) 粘性あり、締まりやや強。小礫少量、焼土ブロック・炭化物 (Φ 1-3mm) 微量含む。
3. 灰色粘土 (7.5Y5/1) 粘性強、締まりやや弱。小礫微量含む。
4. 灰黄褐色粘土質シルト (10YR4/2) 粘性やや強、締まりあり。Ⅴ層土ブロック (Φ 3-10mm) 少量含む。
5. 灰褐色粘土質シルト (7.5YR5/2) 粘性やや強、締まりあり。小礫微量、Ⅴ層土ブロック (Φ 3-15mm) 中量含む。
6. 黒褐色粘土質シルト (7.5YR3/2) 粘性やや強、締まりやや弱。炭化物 (Φ 1-3mm) 微量、Ⅴ層土ブロック (Φ 3-5mm) 少量含む。
7. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性・締まりあり。小礫微量、焼土ブロック (Φ 1-3mm) 少量含む。
8. にぶい赤褐色シルト (5YR5/3) 粘性・締まりあり。焼土ブロック (Φ 3-15mm) 多量、炭化物 (Φ 3-10mm) 中量含む。
9. 褐灰色粘土質シルト (10YR4/1) 粘性やや強、締まりあり。小礫少量、焼土ブロック・炭化物 (Φ 3-5mm) 少量、Ⅴ層土ブロック (Φ 3-5mm) 少量含む。
10. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性あり、締まりやや強。小礫少量、焼土ブロック (Φ 1-3mm) 微量含む。

第 19 図 3号竪穴住居跡実測図



第 20 図 3 号竪穴住居跡カマド実測図



第 21 図 3 号竪穴住居跡出土遺物

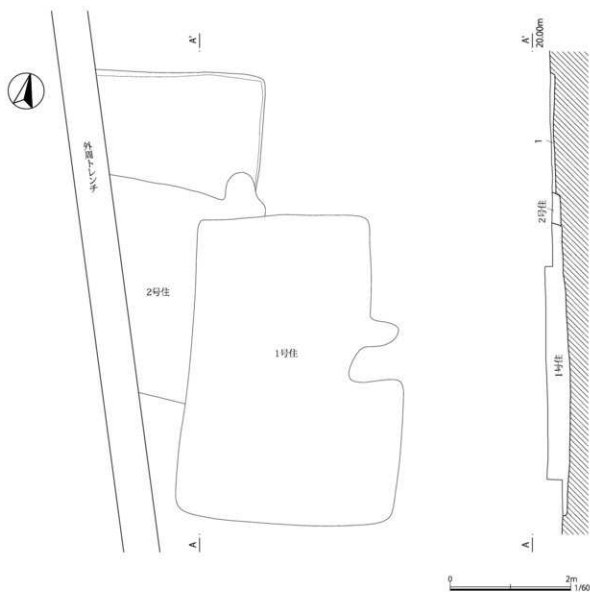
第 5 表 3 号竪穴住居跡出土遺物観察表

発掘 層位	発掘 層位	位置 (m)	形状・成器・装飾・技法・特徴の詳述	出土	組成	色調	備考
1	須恵器 環	1号部～2号部 (11.4) (7.0)	2.6 (外) 口縁ナデ (内) 口縁ナデ	黒土 灰石	良好	外：灰色 (N5/1) 内：灰色 (N6/1)	甕有産地か
2	土師器 環	1号部～2号部 (11.4)	2.3 (外) 口縁ナデ (内) 口縁ナデ	赤 赤土粒、石片 (少)	やや 不良	外：黄褐色 (10YR8/4) 内：黄褐色 (10YR8/3)	カマド以上 内面に油煙付着
3	土師器 甕	1号部～2号部 (25.5)	— (12.6) (外) 口縁部～腹部ナデ、胴部縦化ハナメ (内) 口縁部～腹部ナデ、胴部縦化ナデ	赤 黒土、石片 (多)、白色粒	良	外：黄褐色 (10YR7/4) 内：黄褐色 (2.5Y5/1)	通江型 甕出土
4	土師器 甕	1号部 —	— (3.5) (外) 口縁部～腹部ナデ (縦化折返し口縁) (内) 口縁ナデ	赤 赤土粒 (多)、黒土、白色粒 (多)	良	外：黄褐色 (5YR4/6) 内：黄褐色 (2.5YR4/6)	甕型

出土遺物 (第 21 図 第 5 表 図版 8)

土 器：出土した須恵器・土師器の内 4 点を図示する。1 は須恵器環と考えられる。小片のため詳細な部分が多いが、柱状高台と考えられる底部から口縁部は外方に直線的に開く。産地・年代は不明だが、胎土・焼成の特徴は旅指窯産に類似する。

2～4 は土師器である。2 は手づくね成形の小型環で、口縁部～体部内面に油煙の付着が見られることから灯明具としての用途が想定されるが、先述のとおり、カマド燃焼部から完形の状態で出土したため、本来の用途は不詳である。3・4 は甕である。3 は通江型長胴甕で、口縁部が大きく水平に近い方向に開くが、他の住居跡から出土した同系統の土器群に比して屈曲が弱く、口唇部内面が肥厚することから最も古い様相を呈する。4 は口唇部内面が疑似折返し口縁状に肥厚することから駿東型球胴甕と考えられる。



4号竪穴住居跡

1. 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性あり、綿まりやや流。小礫少量、Vh層土ブロック (Φ 3 ~ 5mm) 中量含む。

第 22 図 4号竪穴住居跡実測図



第 23 図 4号竪穴住居跡出土遺物

第 6 表 4号竪穴住居跡出土遺物観察表

調査 番号	発見 層位	発見 位置	位置 (m)			形状・成形・装飾・技法・造形の特徵	出土 状況	測定	色調	備考
			口縁	底縁	高さ					
1	土層 層	土層部	—	—	(3.6)	(9%) 日乾ナデ (0%) 日乾ナデ→焼酎状ヘラミガキ	黒褐色 赤色粉。雲母細片	良	外：黄褐色 (10YR7/6) 内：褐色 (5YR6/5)	甲斐型
2	土層 層	土層部	—	—	(2.5)	(9%) 日乾ナデ、ヘラミ工具による焼酎 (0%) 日乾ナデ→焼酎状ヘラミガキ	黒褐色 赤色粉。雲母細片	良	外：紅褐色 (7.5YR5/3) 内：紅褐色 (7.5YR5/3)	甲斐型

4号竪穴住居跡（第22図 図版4）

位置：C C・C D-95グリッドに位置する。**遺構状況：**西側は調査区外に延びる。

重複関係：2号竪穴住居跡に切られる。

平面形状：方形 **規模：**長軸（2.83）m×短軸（1.96）m、深度0.05～0.08 m

主軸方位：不明

覆土：黒褐色シルトを主体とする。上部が大きく削平されており、覆土上層の堆積状況は不明であるが、重複する他の住居跡の堆積状況から人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

付帯施設：床面は自然堆積層（Ⅶ層）を掘り込んだ直床で、固く踏み締められている。カマドは検出されず、方位と平面形態から類推して、重複する2号竪穴住居跡に壊された可能性が高いと考えられる。カマド以外の柱穴・周溝等の付帯施設も検出されなかった。

観察所見：重複関係にある3軒の住居跡中最も古く、且つ上面が大きく削平されていることから、遺物の出土は僅少であった。

時期：出土遺物と他の住居跡との重複関係から8世紀末葉～9世紀前葉と考えられる。

出土遺物（第23図 第6表 図版8）

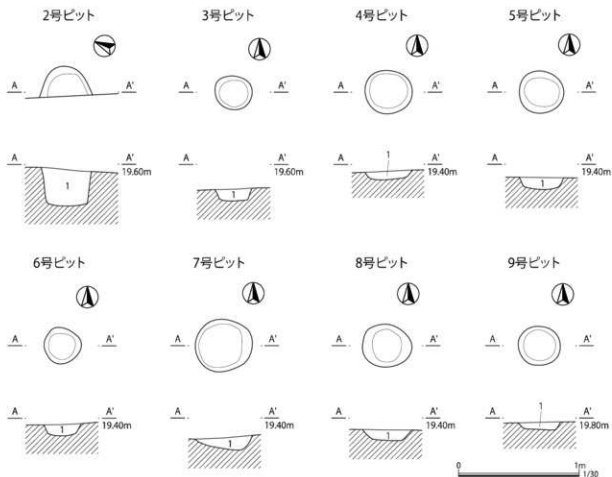
土器：出土した土師器の内2点を図示する。1・2は土師器環である。口縁部破片資料であるが、緻密な胎土と、内面調整の特徴（放射状ヘラミガキ）から、共に甲斐型環と考えられる。2は外面にヘラ状工具による線刻が施される。

（2）ビット

調査区南半部を中心に、ビット8基（2～9号ビット）が検出された（第10・24図）。土師器小片1点が出土した4号ビットを除き、遺物は出土していないが、検出面と覆土の特徴から、帰属時期は概ね奈良・平安時代と考えられる。いずれも規模・形状は近似し、3・5・6号ビット、7・8号ビットはそれぞれ同一の覆土であるが、掘立柱建物跡となるような明確な配置の規則性は見出せなかった。その他詳細はビット計測表（第7表）を参照されたい。

第7表 ビット計測表②

遺構名	グリッド	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	覆土
2号ビット	C C-94	楕円形	0.44	(0.25)	0.31	V-2 層土主体
3号ビット	C C-94	円形	0.31	0.29	0.10	V-1 層土主体
4号ビット	C C-93	楕円形	0.39	0.35	0.07	Ⅵ層土主体
5号ビット	C C-93	円形	0.37	0.35	0.10	V-1 層土主体
6号ビット	C C-93	円形	0.31	0.30	0.09	V-1 層土主体
7号ビット	C C-93	楕円形	0.48	0.44	0.11	Ⅵ層土主体
8号ビット	C C-93	楕円形	0.41	0.36	0.09	Ⅵ層土主体
9号ビット	C C-95	楕円形	0.35	0.32	0.07	V-2 層土主体



2号ビット

1. 黒褐色シルト (7.5YR2/2) 粘性・締まりあり。V-2 層土主体。礫・小礫中量、VII層土ブロック (Φ 3-5mm) 微量含む。

3・5・6号ビット

1. 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性・締まりあり。V-1 層土主体。VII層土ブロック (Φ 3-5mm) 微量含む。

4号ビット

1. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性あり、締まりやや弱。VII層土主体。VI層土ブロック (Φ 3-5mm) 中量含む。

7・8号ビット

1. 灰褐色砂質シルト (7.5YR4/2) 粘性やや弱、締まりあり。VI層土主体。小礫少量、VII層土ブロック (Φ 3-10mm) 中量含む。

9号ビット

1. 黒褐色シルト (7.5YR3/1) 粘性・締まりあり。V-2 層土主体。小礫中量、VII層土ブロック (Φ 1-3mm) 微量含む。

第24図 2～9号ビット実測図

(3) 遺構外出土遺物

遺構外から出土した当該期の遺物を図示、詳述する。

灰釉陶器 (第25図 第8表 図版9)

1～4は碗で、1・2は共に刷毛塗りにより内面に薄く施釉され、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は端反となる。3は口唇部が玉縁状を呈し、口縁部は端反となる。4は体部は直線的に立ち上がり、口縁部は端反となるが、1～3に比して屈曲は小さい。1～4はいずれも宮口窯産で、K 90 号窯式併行 (9 世紀後半) に位置付けられる。

5は有台碗で、やや退化した三日月高台の底部から体部は丸みをもって立ち上がる。宮口窯産で、O 53 号窯式併行 (10 世紀前半) に位置付けられる。6～8は皿で、6・7の口縁部は端反となる。6の体部が丸みをもって立ち上がるのに対し、7の体部は直線的に立ち上がり、口縁部の形状にも差異が見られるが、共に宮口窯産で、K 90 号窯式併行 (9 世紀後半) に位置付けられる。8は内外面に漬掛けによる施釉が施され、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は端反となる。東濃窯 (光ヶ丘窯) 産で、K 90 号窯式併行 (9 世紀後半) に位置付けられる。

9は把手付平瓶である。口縁部～頸部片、肩部～底部片が別個に出土したものを図上復元した。頸部は概ね直線的に立ち上がり、口縁部にかけて緩やかに外傾する。肩部は丸みをもって大きく張り出し、回転ヘラ削りが施された胴部は直線的に立ち上がる。底部には短い高台が貼付けられ、高台は中段で屈曲し、接地面に向かい「ハ」の字に広がる。把手は欠落し、接統部のみが残存する。猿投窯産で、K 90 号窯式 (9 世紀後半) に位置付けられる。

須恵器 (第25図 第8表 図版9)

10～11は蓋で、10は擬宝珠形の摘み部が残存し、天井部は回転ヘラ削りが施される。11は口縁端部が屈曲し、内湾気味に垂下する。共に湖西窯産で、8 世紀前半に位置付けられる。12・13は坏で、12は体部から口縁部にかけて概ね直線的に開き、体部下端は回転ヘラ削りが施される。13の底部は回転糸切後未調整で、体部との境に明瞭な稜を有し、擬高台状を呈する。14は高台付坏で、底部に扁平な高台が貼付けられる。12・14は湖西窯産、13は産地不明である。

15～19は甕で、15～17は口唇部が肥厚し、垂下する。15・16は頸部に断面三角形の凸帯が貼付けられ、17は直線的に大きく開く口縁部外面に櫛刺突による矢羽状の列点文が施される。18は外傾気味に立ち上がる頸部外面に1条以上のヘラ描き沈線が施され、19は弓状に外反する頸部外面に6条2段の櫛描波状文が施される。いずれも湖西窯産で、8 世紀前半に位置付けられる。

土師器 (第26図 第8表 図版10)

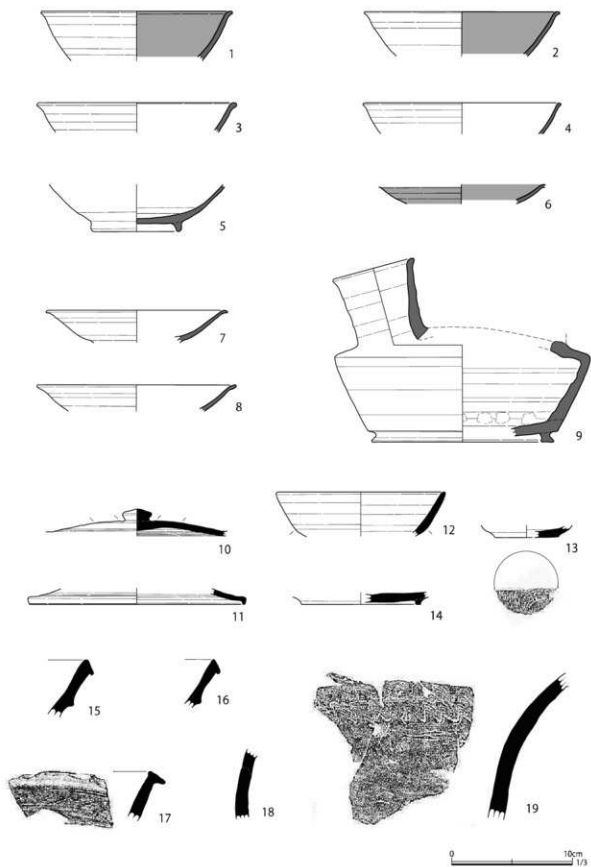
20は蓋である。口縁部は水平方向に開き、端部の屈曲は弱い。須恵器蓋を模倣した形状で、調整に回転ヘラミガキ調整が施され、外観においても須恵器模倣の指向が認められる。21～24は坏で、いずれも駿東型坏である。23は体部内面に横位ヘラミガキ、底部内面に放射状ヘラミガキ (暗文) が施される。24は底部外面に墨書が施される。書字の一部が欠損しているが、「豊」と判読される。「豊」は吉祥を表す字句として使用頻度が比較的高く、県内では、内荒遺跡 (静岡市葵区) 他で、これまでに14例が確認されている。25は駿東型の高台付坏で、体部内面に精緻な横位ヘラミガキが施されるが、黒色処理は見られない。欠損部が多いが、高台は「ハ」の字に広がると推定される。26・27は皿である。26は体部から口縁部にかけて大きく外反しながら立ち上がり、体部外面にクロコ整形痕を明瞭に残し

ている。口唇部には微量ながら煤が付着し、灯明具として使用された可能性を示唆する。底部は未調整で、回転糸切痕を残し、その上部にヘラ状工具による交叉状の線刻が施される。27は体部から口縁部にかけて概ね直線的に立ち上がる。26・27は全体形状に差異が見られるが、胎土・焼成・色調は類似する。系統は不明であるが、共にロクロ整形による調整・形態等の特徴から1～4号竪穴住居跡出土遺物に後出する10世紀中葉に位置付けられる。北側に隣接する町屋遺跡で10世紀前半～中葉の集落が確認されていることから、当集落との関連性が想定される。

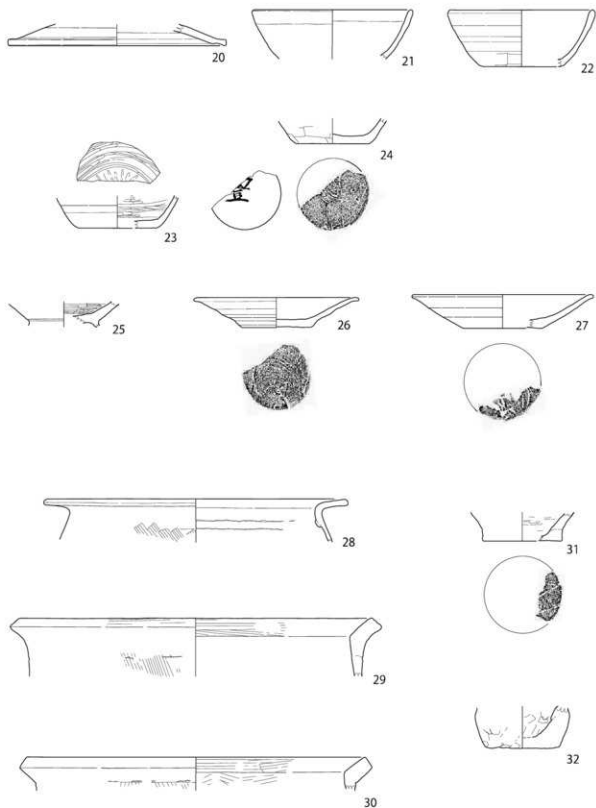
28～31は甕である。28は遠江型長胴甕で、口縁部が大きく水平に開く。1～3号竪穴住居跡から出土した同型式の甕に比して屈曲度が大きく、新しい様相を呈する。29～31は甲斐型長胴甕である。29は形態・調整技法等に甲斐型長胴甕の特徴を有しているが、他の甲斐型長胴甕と異なり、胎土中に甲斐型長胴甕特有の金雲母が全く含まれず、胎土は遠江型長胴甕に類似している。甲斐・遠江折衷型と言えるべき土器であり、他の甲斐型長胴甕が故地である甲斐地域から直接持ち込まれたと考えられるのに対し、29の土器はそれを模倣し、遠江地域（の胎土）で製作されたものである可能性が高いと考えられる。いわゆる「折衷型」の類例は本遺跡以外でも少なからず確認されており、古代における駿河・遠江・甲斐地域間での人的・物的交流のあり方を考える上で有益な資料となり得よう。29・30は共に口縁部が肥厚し、甲斐型長胴甕の中で「厚口縁型」に分類されるタイプで、30は甲斐編年Ⅺ期（『山梨県史』編年Ⅵ期相当）で10世紀前葉、29は甲斐編年Ⅻ期（『山梨県史』編年Ⅶ期相当）で10世紀中葉に位置付けられる。本調査地点の出土遺物では最も新しい段階に属するものである。

32は製塩土器である。製塩土器は近年、隣接調査区（小里前遺跡・庵原館跡第1・3次、庵原館跡・町屋遺跡第1次）で相次いで出土しており、注目されている。なお、ここで言う製塩土器は、平野修氏が町屋遺跡報告書（静岡市教育委員会 2017）で述べられているように、「土器製塩」に用いられた土器ではなく、作製された塩を運搬する容器と考えている。

現時点で、本遺跡周辺で出土した製塩土器は大きく、内面に布目圧痕を残す「砲弾形」と、ナデ・ヘラナデ整形が施された「コップ形」の2類に分かれ、32は「コップ形」に属すると思われる。前述の報告書で述べられた平野氏の分析によれば、「砲弾形」は駿河国独自の製塩土器と捉えられており、それに対し、「コップ形」は甲斐国内で多く見られるとされている。製塩土器は、甲斐型環・甕同様に、甲斐地域との密接な交流が窺える貴重な資料と言えよう。古代における駿河・遠江・甲斐3国間での人的・物的交流については、第6章でも触れることにしたい。



第 25 図 遺構外出土遺物（奈良・平安時代①）



第 26 図 遺構外出土遺物（奈良・平安時代②）

第8表 遺構外出土遺物(奈良・平安時代) 観察表

[illegible]

第3節 古墳時代

(1) 古墳時代後期の遺物

当該期の遺構は検出されなかったが、他の時代の遺構覆土や遺物包含層中から遺物が出土した。須恵器の薄片が2点出土したのみで、当該期は本遺跡において客体的な時期であったと考えられる。以下に図示、詳述する。

須恵器（第27図 第9表 図版10）

1は高杯の脚部で、外面に2条のヘラ描き沈線が施される。2は瓶類の口縁部と考えられる。器面調整が粗く、内外面にロク口成形痕を明瞭に残す。1は秋葉山窯跡群産で、6世紀後半、2は産地不明であるが、概ね7世紀代に位置付けられると考えられる。



第27図 遺構外出土遺物（古墳時代後期）

第9表 遺構外出土遺物（古墳時代後期）観察表

調査 区分	発見 層位	検出 位置	検出 層位	検出 高さ	形態・破損・装飾・用途の特徴	出土 状況	組成	色調	備考
1	第2層 高杯	脚部	—	(3.3)	(外) 口縁ナデ、ヘラ描き沈線 (2条)	断片	やや不純 (黄灰)	外: 灰白色 (5Y7/1) 内: 灰白色 (7.5Y7/1)	秋葉山窯跡群産 N1層出土
2	第2層 瓶	口縁部	(10.2)	(3.5)	(外) 口縁ナデ (内) 口縁ナデ	断片	純白 (白色)	外: 灰白色 (7.5Y6/1) 内: 灰白色 (7.5Y6/1)	産地不明 N1層出土

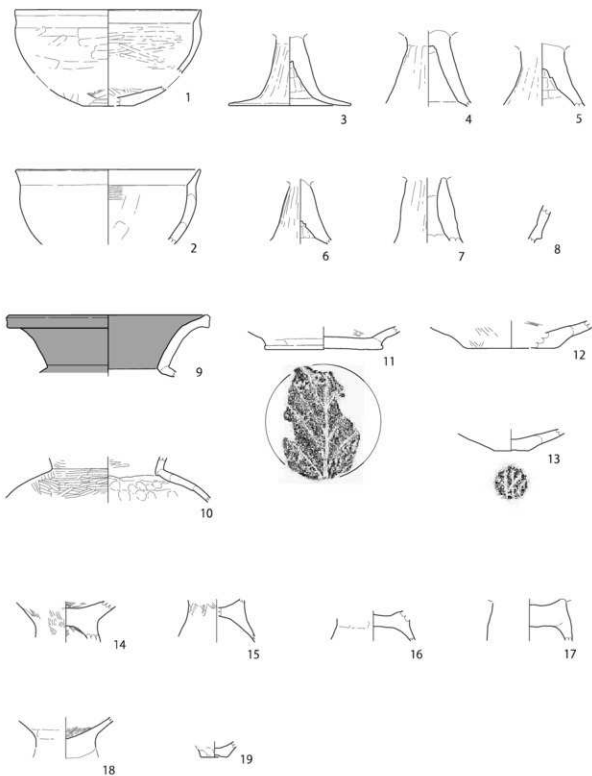
(2) 古墳時代中期の遺物

V・2層を中心に遺物包含層中から、当該期の土器が多く出土した。本調査地点では当該期の遺構は検出されなかったが、南側に位置する第2・3次調査区で遺構（土器集中）が確認されていることから周辺部からの流れ込みと考えられる。以下、出土した土器の内19点を図示、詳述する。

土器（第28図 第10表 図版11-1）

1・2は壺である。1は口縁部～体部片、底部片が別個に出土したものを図上復元した。1・2共に口縁部と体部の境に明瞭な稜を有するが、1は口縁部が内湾気味に立ち上がるのに対し、2は口縁部が外傾し、口縁部の形状に差異が見られる。3～7は高杯の脚部である。いずれも脚部下端に向かうにつれ外方に開いていく傾向が見られるが、7は3～6に比して開きが小さい。3～6は杯部との接合部がホゾ状を呈するのに対し、7のみホゾ穴状を呈することから1段階古い型式であると考えられる。

8～12は壺である。8は複合口縁部で、9は内外面に赤彩が施され、口縁部は粘土紐が貼付けられ、肥厚する。10は外面に精緻な横位ヘラミガキが施される。11・12は底部で、11は木葉痕が認められる。13は小型壺の底部で、外面に木葉状のヘラ記号が認められる。14～18は台付甕の脚部で、形態にバリエーションが見られる。小片のため全形が分かる資料は無いが、複数の型式に分かれるものと考えられ、一部は古墳前期に下る可能性がある。19は指頭押捺で整形された壺形のミニチュア土器と考えられる。



第 28 図 遺構外出土遺物 (古墳時代中期)

第 10 表 遺構外出土遺物 (古墳時代中期) 観察表

調査 番号	発見 位置	発見 深度	出土 位置	形状・成色・装飾・技法・発見の特徴	出土	組成	色調	備考	
1	土師器 遺	口縁部～底部 (15.2)	(4.2)	(8.0)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ、底部ヘナナデナデ (9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデナデ	赤色釉 (多)、雲母、長石	良	外：褐色 (5YR6/6) 内：褐色 (5YR6/6)	N-2層出土
2	土師器 遺	口縁部～底部 (15.2)	—	(6.2)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ (9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ	赤色釉 (多)、長石、角閃石 (多)	良	外：にえい・褐色 (7.5YR6/4) 内：褐色 (7.5YR6/4)	N-2層出土
3	土師器 遺	口縁部 —	(10.0)	(3.7)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ、底部ナデ (9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ	赤色釉、長石、角閃石 (多)、小礫	良	外：褐色 (7.5YR6/4) 内：にえい・褐色 (10YR6/4)	N-2層出土
4	土師器 遺	口縁部 —	—	(6.3)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ (9) ナデ	赤色釉、長石、小礫	良	外：褐色 (7.5YR6/4) 内：褐色 (7.5YR6/4)	N-1層出土
5	土師器 遺	口縁部 —	—	(3.2)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ (9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ	赤色釉 (多)、長石、小礫 (多)	良	外：にえい・褐色 (7.5YR7/4) 内：にえい・褐色 (7.5YR7/4)	N-1層出土
6	土師器 遺	口縁部 —	—	(3.4)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ (9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ	赤色釉、長石、角閃石、小礫	良	外：にえい・褐色 (7.5YR7/4) 内：にえい・褐色 (7.5YR6/4)	N-1層出土
7	土師器 遺	口縁部 —	—	(3.4)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ (9) ナデ	赤色釉、小礫	良	外：にえい・褐色 (10YR7/4) 内：褐色 (5YR7/6)	N-2層出土
8	土師器 遺	口縁部 —	—	(3.1)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ (9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ	赤色釉、小礫	良	外：褐色 (7.5YR7/4) 内：にえい・褐色 (7.5YR7/4)	N-2層出土
9	土師器 遺	口縁部～底部 (16.2)	—	(5.3)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ、底部ナデ (9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ	赤色釉、長石、角閃石、小礫	良	外：にえい・褐色 (10YR7/4) 内：褐色 (7.5YR7/6)	N-2層出土
10	土師器 遺	口縁部～底部 —	—	(3.8)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ (9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ	赤色釉、雲母、長石	良	外：褐色 (7.5YR6/4) 内：灰褐色 (10YR5/2)	N-2層出土
11	土師器 遺	口縁部～底部 —	(8.6)	(1.8)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ、底部ナデ (9) ハネメーヘナナデ	赤色釉、長石、小礫	良	外：褐色 (7.5YR6/4) 内：褐色 (2.5Y5/2)	N-2層出土
12	土師器 遺	口縁部～底部 —	(7.8)	(2.3)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ、底部ナデ (9) ハネメーヘナナデ	赤色釉、長石、小礫	良	外：にえい・褐色 (7.5YR7/4) 内：褐色 (5YR7/6)	N-2層出土
13	土師器 遺	口縁部～底部 —	2.8	(1.8)	(9) ナデ、球形ハネメーヘナナデ (9) ナデ	赤色釉、雲母、長石、角閃石 (多)、小礫	良	外：にえい・褐色 (10YR7/4) 内：褐色 (5YR7/6)	N-2層出土
14	土師器 遺	口縁部～底部 —	—	(3.4)	(9) ハネメーヘナナデ (9) ハネメーヘナナデ	赤色釉、長石、小礫 (多)	良	外：にえい・褐色 (5YR6/4) 内：にえい・褐色 (7.5YR6/4)	N-2層出土
15	土師器 遺	口縁部 —	—	(3.6)	(9) ハネメーヘナナデ (9) ハネメーヘナナデ	赤色釉、長石、小礫	良	外：褐色 (2.5YR6/4) 内：褐色 (5YR6/6)	N-2層出土
16	土師器 遺	口縁部 —	—	(2.5)	(9) ヘナナデ (9) ナデ	赤色釉、長石、小礫 (多)	良	外：褐色 (5YR6/6) 内：にえい・褐色 (7.5YR6/4)	N-1層出土
17	土師器 遺	口縁部 —	—	(3.5)	(9) ナデ (器底部分のため不詳) (9) ナデ (器底部分のため不詳)	赤色釉、長石、小礫	良	外：にえい・褐色 (7.5YR6/4) 内：褐色 (5YR6/6)	N-2層出土
18	土師器 遺	口縁部～底部 —	—	(3.4)	(9) ヘナナデ (9) ハネメーヘナナデ	赤色釉、長石 (多)、角閃石、小礫	良	外：にえい・褐色 (5YR6/4) 内：にえい・褐色 (10YR6/4)	N-2層出土
19	土師器 遺	口縁部 —	—	(3.4)	(9) 土師器罐ナデ、球形ハネメーヘナナデ (9) ナデ	赤色釉、長石 (少)、小礫	良	外：にえい・褐色 (10YR7/4) 内：褐色 (7.5YR6/4)	N-2層出土

(3) 古墳時代前期の遺物

当該期の遺構は検出されなかったが、北側に位置する町屋遺跡で当該期の竪穴住居跡・方形周溝墓が確認されており、調査区北側において流れ込みと考えられる当該期の土器が 1 点出土した。以下に図示、詳述する。

土師器 (第 29 図 1 第 11 表 図版 11-2-1)

1 は S 字状口縁台付甕の頸部である。形状から C 類 (古墳時代前期前半) に分類される。



第 29 図 遺構外出土遺物 (古墳時代前期)

第 11 表 遺構外出土遺物 (古墳時代前期) 観察表

調査 番号	発見 位置	発見 深度	位置 (cm)		形状・成色・装飾・技法・発見の特徴	出土	構成	色調	備考
			口縁	底面					
1	土師器 台付甕	口縁部～底部	—	—	(2.1) (9) ハネメーヘナナデ (多) (9) ナデ	赤色釉 (多)、石質	良	外：にえい・褐色 (7.5YR7/4) 内：にえい・褐色 (7.5YR6/4)	S 字状口縁 (C 類) N-2 層出土

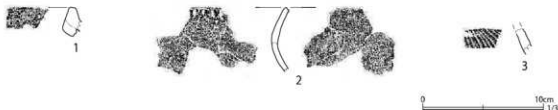
第4節 弥生時代

(1) 弥生時代後期の遺物

当該期の遺構は検出されなかったが、調査区北側を中心に、流れ込みと考えられる弥生土器が6点出土した。その内3点を図示、詳述する。

弥生土器（第30図1～3 第12表 図版11-2-2～4）

2は手焙形土器の覆部である。端部は粘土紐貼付けにより肥厚し、内面に2段の円形竹管文が施される。3は台付甕の口縁部～頸部で、口唇部にヘラキザミ、内外面にハケメ調整が施される。形態・調整の特徴から登呂式と考えられる。4は外面に斜状の櫛刺突文が施文される。調整の特徴から菊川式と考えられる。2は弥生時代末～古墳時代初頭、3・4は弥生時代後期前半に位置付けられる。



第30図 遺構外出土遺物（弥生時代後期）

第12表 遺構外出土遺物（弥生時代後期）観察表

調査 番号	発見 箇所	保存部位	位置 (m)			形態・成り・調整・紋様・施文の特徴	出土	観察	色調	備考
			口縁	胴部	底面					
1	弥生土器 手焙形 土器	口縁部	—	—	(2.4)	(外) ヘラナデ (内) ナデ、円形竹管文 (2段)	漆 小破	良	外：紅い・黄褐色 (10YR7/4) 内：紅い・黄褐色 (10YR7/4)	N2層出土
2	弥生土器 台付甕形	口縁部～頸部	—	—	(3.0)	(外) 口唇部ヘラキザミ、口縁部～頸部面ハケメ (内) 口縁部ハケメ、胴部面ハケメ→横位ヘラナデ	漆 赤褐色、白色乾、小破 (多)	良	外：褐色 (7.5YR7/6) 内：灰黄褐色 (10YR6/2)	登呂式 N2層出土
3	弥生土器 甕形	口縁部	—	—	(2.1)	(外) 櫛刺突文 (内) ナデ	漆 赤色乾	良	外：紅い・黄褐色 (10YR7/4) 内：紅い・黄褐色 (10YR7/3)	菊川式 N2層出土

第6章 考察

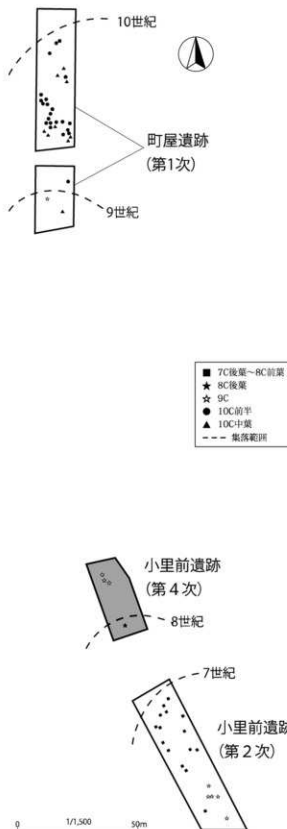
第1節 集落の変遷

本調査地点で検出された4軒の竪穴住居跡の年代は、8世紀後葉～9世紀後葉に位置付けられ、3号住→4号住→2号住→1号住の順で推移する。1号住居跡からは他の住居跡では出土していない灰釉陶器・甲斐型甕が出土しており、2号住→1号住の間には空白・断絶期間があったことが推定される。

周辺の調査成果に着目すると、本調査地点北側で調査された町屋遺跡（第1次）において、10世紀前半～中葉の住居跡がまとめて確認され、南側で調査された小里前遺跡（第2次）では7世紀後葉～8世紀前葉、9世紀前葉～後葉の住居跡が確認されている（第31図）。なお便宜上、遺跡名は分かれているが、小里前遺跡、町屋遺跡で確認された住居跡群には時代的連続性が認められ、両遺跡は同一集落と捉えられる。

集落の変遷は第31図に示す通りで、遺跡南側（清水平野南側の微高地）から遺跡北側（清水平野北側の丘陵部）へ向かうにつれ、年代が新しくなる傾向が看取される。先述のとおり、本調査地点周辺では河川氾濫の痕跡が随所で確認されており、時代が下るにつれて居住に適さない環境への変化に伴い、より地勢が安定した丘陵縁辺部へと集落が移動していることが想定される。

本調査地点で検出された竪穴住居跡は4軒で、他の地点に比して遺構密度や遺物の出土量は決して多くなかった。調査区壁断面の観察所見からは、住居廃絶後に河川氾濫による何度もの砂礫の流入が認められ、一つの想定として8世紀後葉の居住開始段階には居住に適した土地であったが、9世紀代には居住に適さない環境へと変化し、住居が放棄されたことが推察される。



第31図 時期別住居跡分布図

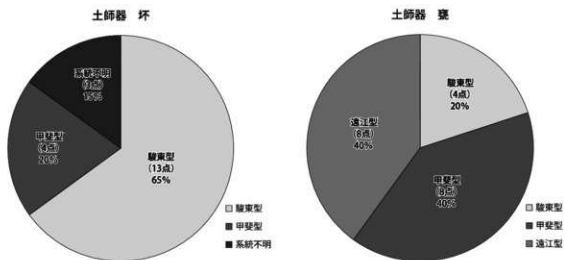
第2節 奈良・平安時代の土器について

(1) 土師器

器種としては、蓋・坏・高台付坏・皿・甕・製塩土器が認められる。以下、その主体を占める坏（皿）・甕について詳述する（第31・32図）。

坏は駿東型・甲斐型の2類に大別される。掲載個体20点中13点が駿東型坏で、全体の65%とその主体を占める。それに対し、甲斐型坏は4点（20%）と客体的である（第32図）。甲斐型坏は、赤色粒を含む精選された緻密な胎土が特徴的で、内面には放射状ヘラミガキ（暗文）が施される。他型式の坏に比して全体に非常に精緻な作りとなっており、識別は比較的容易である。本調査地点で出土した甲斐型坏の時期は、底径（6.0cm）と内面のヘラミガキ調整の特徴から8世紀第4四半期～9世紀第1四半期（甲斐編年VI・VII期）に相当し、時期幅はほぼ見られない。故地である甲斐国ではおよそ10世紀末まで甲斐型坏が生産され続けるが、北側に隣接する町屋遺跡（第1次）においても掲載個体34点中、甲斐型坏は1点（3%）のみという調査成果が得られており、本遺跡への甲斐型坏の流通は9世紀以降の傾向が認められる。その背景には9世紀前半以降、駿河国への普及が拡大する尾張・遠江国産の灰釉陶器の存在があると考えられる。本調査地点ではK90号窯式期（9世紀後半）の猿投窯・宮口窯産の灰釉陶器が掲載個体で12点出土しており、隣接調査地点でも同様な成果が認められることから、食膳具である甲斐型坏の代替物の一翼を灰釉陶器が担っていた可能性が考えられる。

使用時期が限定される甲斐型坏に対し、駿東型坏は集落の存続期間中一貫して継続使用される傾向が認められ、坏全体に占める駿東型坏の比率は本調査地点で65%、町屋遺跡（第1次）で71%と群を抜いている。形態の変遷（編年）を第33図に示したが、これまでの研究成果に倣い、時代が下るにつれ、体・底部内面のヘラミガキ（暗文）の簡略化・消失と、底径の縮小化傾向が認められる。本調査地点で出土した駿東型坏は、体部が直線的に立ち上がる形式と内湾気味に立ち上がる形式の2形式に大きく分けられるが、共に上述した形態・調整の変遷を辿っており、形式による違いは認められない。



第32図 土師器坏・甕型式分類

駿東型・甲斐型の系統に属さない不明の型式として3点を図示したが、その内、3号竪穴住居跡から出土した手づくね成形の小型環（第21図2）は、富士市東平遺跡（第37地区4次調査）11・12号竪穴住居跡（佐藤 2009）、富士市天間代山遺跡7号竪穴住居跡（富士市教育委員会 1977）等で類例が確認されており、駿河国東部地域に分布がまとまる傾向が見られる。いずれも本遺跡3号竪穴住居跡出土例と同様に遠江型長胴甕と共存関係にあり、時期も8世紀中葉～後葉にまとまりを見せる。3号竪穴住居跡出土の環の色調は浅黄褐色を呈し、胎土中に赤色粒が含まれるのが特徴で、この胎土は駿東型環・甕よりも遠江型長胴甕の胎土に類似することから、共存関係にある長胴甕と同様に遠江地域にその系譜を辿れる可能性が考えられる。今後の更なる類例の増加を待ちたい。

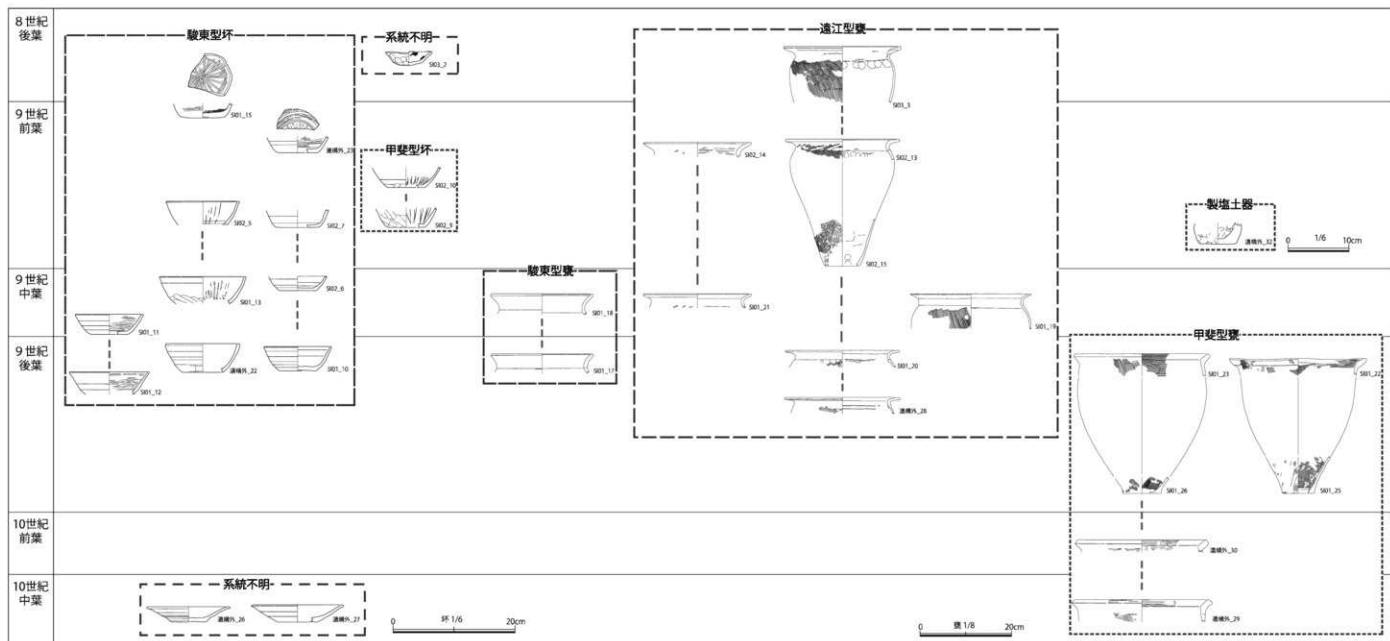
系統不明の皿とした2点（第26図26・27）は、灰釉陶器皿を模したと考えられる形状と、簡略化された回転ナデ調整から10世紀中葉に位置付けられる。共に低温度焼成による影響からか、やや軟質な焼き上がりで、色調も淡色である。形態は甲斐編年Ⅻ期（『山梨県史』編年Ⅶ期相当）段階の資料に比較的類似するものの、甲斐型環とは胎土が全く異なるため、甲斐型とは考え難い。これらは胎土に赤色粒を多量に含むのが特徴で、強いて言えば駿東型環の胎土に類似するため、現時点では駿東型環の系統に連なる可能性を指摘するにとどめておきたい。

甕は駿東型・遠江型・甲斐型の3類に分類される。その比率は、駿東型20%（4点）、遠江型40%（8点）、甲斐型40%（8点）を数え、環とは異なり駿東型が最も少ないという興味深い傾向が認められる（第32図）。同様の分類・分析は町屋遺跡報告書（静岡市教育委員会 2017）にて、鈴木敏中氏もっており、駿東型23%、遠江型37%、甲斐型40%という本調査地点とほぼ同じ比率が得られている。町屋遺跡では、本遺跡に継続する10世紀前半～中葉の集落が確認されており、少なくとも8世紀後葉から10世紀中葉にかけて長期間一貫して、同じ基準で土師器甕を使用（採用）し続けていたことが推察される。小里前・町屋遺跡に集落を築いた集団の出自・性格を考察する上で格好の資料となり得よう。

掲載個体計20点の内、球胴甕は第14図16、第21図4の2点のみである。他18点は全て長胴甕で、全体の90%を占める。球胴甕2点は共に駿東型で、1・3号竪穴住居跡から出土している。型的に長胴甕に先行する時期のもので、共に口縁部のみで全体形状は不詳であるが、時代が下るにつれ、口縁部の外反が緩やかになると共に短小化し、それに比例して器厚が厚くなる傾向が窺える。

遠江型長胴甕は1～3号竪穴住居跡から出土しており、8～9世紀代を通して長期間に亘り組成の主体を担っていたと考えられる（第33図）。遠江型長胴甕は口縁部が水平方向に大きく開き、頸部～胴部外面に細かいハケメ調整が施されるという特徴を有するが、本調査地点の遠江型長胴甕を概観すると、時代が下るにつれ、頸部の屈曲度が強くなり、9世紀後葉には第14図20、第26図28に見られるように、口縁部がほぼ水平になる傾向が認められる。また、口唇部内面に着目すると、第33図に示したとおり、8世紀後葉段階のSI03_3は口唇部内面が顕著に肥厚するが、SI03_3（第21図3）→SI02_13（第18図13）→SI01_20（第14図20）と時代が下るにつれ、肥厚の度合いが緩やかになり、9世紀後葉段階には口縁部全体が水平化し、器厚の違いは無くなっていく。

甲斐型長胴甕は遺構外出土遺物を除くと、4軒の竪穴住居跡中で最も新しい1号竪穴住居跡からのみ出土している。第33図に示したとおり、本調査地点で出土した甲斐型長胴甕はいずれも口径が広がり、口縁部の器厚が厚くなる「厚口縁型」に分類され、甲斐編年Ⅹ～Ⅻ期（『山梨県史』編年Ⅴ～Ⅶ期相当）で9世紀後葉～10世紀中葉に位置付けられる。甲斐編年Ⅸ期（『山梨県史』編年Ⅳ期）以前に見られる「薄口縁型」の出土は認められない。



：同一系統（長さは時期幅に比例）

第33図 奈良・平安時代土器編年

甲斐型長胴甕は胎土に明瞭な特徴を有し、識別が容易である。金雲母を多量に含むやや粗い胎土で、色調は暗赤褐色系統を呈する。同じ甲斐型土器の系譜に含まれる甲斐型坏も、先述のとおり胎土が特徴的であるが、坏・甕では胎土の傾向が正反対で、用途に応じて胎土を使い分けていたと考えられる甲斐国の技術力・ブランド力が感じられ、甲斐型土器は製品として流通していたことを想起させる。先述のとおり、「コップ形」の製塩土器（第26図32）も甲斐国を出自とする可能性が高いことから、9世紀後半代に甲斐国との交流・交易が活発化したと考えられる。また、第33図遺構外_29（第26図29）は、形態・調整技法は甲斐型長胴甕の特徴を有しているが、胎土は遠江型長胴甕に酷似するいわゆる「折衷型土器」である。「折衷型土器」の存在は交流の深度を推し量る有益な資料と言える。

(2) 須恵器

器種としては、蓋・坏・高台付坏・甕が認められる。大半が破片資料のため、不詳な部分も多いが、本節ではその生産地の変遷について概観したい。

8世紀前半～中葉にかけて湖西窯産の製品が本集落に大量に流通し、その後、同窯の操業・流通が縮小化する8世紀中葉～後半に至ると、秋葉山窯跡群等の駿河在地窯の製品が少量であるが流通する傾向が認められる。9世紀代に入ると、後述する灰釉陶器に比して客体的となるものの、遠江国窯（宮口窯ほか）産の須恵器が少量ではあるが流通する。第1・2号竪穴住居跡から出土した宮口窯産の須恵器坏（第13図7・第18図2）は、同窯の灰釉陶器と同質の胎土を用いており、灰釉陶器と見紛う程非常に精緻な作りとなっているのが特徴的である。

(3) 灰釉陶器

器種としては、碗・有台碗・皿・段皿・把手付平瓶が認められる。須恵器同様に大半が破片資料で、掲載個体も12点と僅少である。以下にその概要を述べる。

本調査地点で出土した灰釉陶器は、猿投窯・宮口窯・東濃窯（光ヶ丘窯）の3窯で生産されたものと考えられる。年代はK90号窯式併行期（9世紀後半）にほぼ集約され、第25図5の有台碗のみ、1段階新しいO53号窯式併行（10世紀前半）に位置付けられる。東濃窯（光ヶ丘窯）で生産された皿（第25図6）が出土していることから、9世紀後半には交易範囲がより遠隔地へと拡大していったことが想起される。なお、本調査地点での出土は僅少であったが、隣接調査地点からは多量の灰釉陶器が出土しており、その他にも本調査地点では3点（第18図11・12、第26図24）のみの出土にとどまったが、墨書土器の出土例も多く確認されており、本遺跡周辺に官衙関連施設が置かれていた可能性が想定されている。

第7章 総括

(1) 検出遺構について

今回の調査では、第2検出面において主要となる遺構（竪穴住居跡）を検出した。河川氾濫の影響で基盤層と遺構覆土の土質や色調の差が小さく、遺構検出が難しい地点も多かった。

検出された遺構は、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡4軒、ピット8基で、竪穴住居跡には切り合いが認められた。規模や構造上からは特別な住居跡は認められず、カマドは北東隅、北辺、東辺に配置され、柱穴・周溝等の付帯施設はどの住居跡からも検出することは出来なかった。

なお、「小里前遺跡」と重複して中世の「庵原館跡」が遺跡として登録されているが、平成26年度実施の第1次調査から今回の第4次調査に至るまで、中世に属する遺構・遺物はほとんど検出されていない。

(2) 小里前遺跡の性格について

小里前遺跡では、これまでに第1次調査で、奈良時代から平安時代の墨書土器や円面硯、帯金具等の公的施設（郡衙の可能性が考えられる）に関連する遺物が竪穴住居跡から検出されている。しかし、検出された遺構は竪穴住居跡のみで、規則的に配置された掘立柱建物跡等は検出されておらず、公的施設本体とは考え難い。

続く第2次調査地点は、第1次調査地点の北方約200mに位置し、公的施設に関連する遺物（墨書土器や円面硯など）は全く出土しなかったが、当該期の鍛冶工房が検出された。律令期であり、精錬から鍛冶まで実施しているとすれば、公的鍛冶工房と考えられる。こうした公的鍛冶工房は公的施設の縁辺部に配置される例が多いため、第2次調査地点は公的施設の縁辺に位置するものと評価される。

今回の第4次調査では、公的施設との関連を窺わせる遺物として墨書土器が3点出土した（うち2点は2号住居跡から出土）。本調査地点にも7～9世紀代の公的施設と関係する集落が広がっていることが確認された。今回の調査は、南北に長く、東西は幅10mに満たない範囲であるため、東西方向の集落範囲を今後確定させていく必要がある。

参考文献

- 富士市教育委員会 1977 『天間代山遺跡』
- 相武古代研究会 1981 『シンボジウム盤状杯—奈良時代土器の様相—』
- 及川 司 1981 『東平 遺物・考察編』富士市教育委員会
- 羽島靖子 1983 『中島下舞台遺跡』三島市教育委員会
- 佐野五十三 1987 『浅間山遺跡・永原迫分遺跡の土器検討』『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』
- 北川恵一 1988 『『駿東型の甕』の初現と終末について』『沼津市博物館紀要』第12号
- 山田成洋 1988 『内荒遺跡（遺物編）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 佐藤達雄 1988 『大谷川Ⅲ（遺物編）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 佐藤達雄 1989 『大谷川Ⅳ（遺物・考察編）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 坂本美夫 1990 『黒色土器の出現と展開（2）—山梨県地域—』『東国土器研究』第3号
- 田尾誠敏 1990 『東海大学校地内遺跡調査団報告2』東海大学校地内遺跡調査団
- 佐野五十三 1990 『清野型甕の研究—煮沸形態からみた古代末の東海地方—』『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅲ』
- 平野吾郎 1991a 『宮下遺跡（遺物編）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 平野吾郎 1991b 『遠江・駿河における歴史時代土器の成立と展開』『古代探源Ⅲ』早稲田大学出版部
- 山田成洋 1992 『川合遺跡 遺物編Ⅰ（土器・土製品図版編）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 平野 修 1992a 『山梨県北詰市 宮ノ前遺跡』北詰市遺跡調査会
- 平野 修 1992b 『山梨県内出土の墨書土器と線刻土器』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第4集
- 山梨県考古学協会 1992a 『甲斐型土器—その編年と年代—』
- 山梨県考古学協会 1992b 『山梨県考古学協会誌』第5号
- 田尾誠敏 1992 『東海大学校地内遺跡調査団報告3』東海大学校地内遺跡調査団
- 佐野五十三 1994 『遠江・駿河・伊豆の古代集落の土器：土師器を中心として』『静岡県史研究』第10号
- 佐野五十三 1995 『墨書土器観試論』『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』
- 田尾誠敏 1995 『東海大学校地内遺跡調査団報告5』東海大学校地内遺跡調査団
- 池谷初恵 1995 『箱根田遺跡』『三島市埋蔵文化財調査報告Ⅳ』三島市教育委員会
- 池谷初恵 1995 『大場川遺跡群』三島市教育委員会
- 山田成洋 1996 『川合遺跡 遺物編Ⅰ（土器・土製品本文編）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 佐野五十三 1996 『湯・駿・豆における古代の煮沸具』『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム
- 田尾誠敏 1997 『東海大学校地内遺跡調査団報告7』東海大学校地内遺跡調査団
- 田尾誠敏 1998 『東海大学校地内遺跡調査団報告8』東海大学校地内遺跡調査団
- 鈴木良孝 1998 『川合遺跡志保田地区』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 高橋一夫 1998 『手焙形土器の研究』六一書房
- 東国土器研究会 1999 『東国土器研究』第5号
- 山梨県 1999 『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）
- 柴田 睦 2000 『恒武西浦・西宮遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 東海土器研究会 2000 『須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築—第1～第4分冊』
- 東海土器研究会 2001 『須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築—第5分冊』
- 佐野五十三 2001 『破魔射場遺跡』『富士川SA関連遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

- 木ノ内義昭 2001 『東平遺跡 第28地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 木ノ内義昭 2002 『東平遺跡 第16地区(三日月庵寺跡)、第27地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 柴田 睦 2002 『藤守遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 柴田 睦 2003 『藤守遺跡Ⅱ』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 渡井英誉 2003 『富士宮市の遺跡Ⅱ』富士宮市教育委員会
- 岡本範之 2004 『中島B遺跡上舞台地点』『三島市埋蔵文化財調査報告Ⅸ』三島市教育委員会
- 勝俣竜哉 2005 『御殿場市内における甲斐型土器の様相～食膳具について～』『静岡県考古学研究』No.37
- 末木 健 2007 『墨書土器ネットワークの検討ー甲斐国巨麻郡の事例ー』『山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』23
- 佐藤祐樹 2008 『祢宜ノ前遺跡』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹 2009 『東平遺跡 葬祭場建設に伴う東平遺跡第37地区4次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会
- 井鍋啓之 2010 『庵原城跡 第二東名No.66地点』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 溝口彰啓他 2011 『助宗古窯群』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 静岡県考古学会 2013 『駿河における前期古墳の再検討』
- 後藤健一 2015 『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房
- 愛知県 2015 『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』
- 東海土器研究会 2015 『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』
- 静岡市教育委員会 2013 『一丁田遺跡(4区)』
- 静岡市教育委員会 2015 『小里前遺跡・庵原館跡』
- 静岡市教育委員会 2016 『小里前遺跡・庵原館跡(第2次)』
- 静岡市教育委員会 2017 『町屋遺跡』

写真図版



1. 調査区遠景（南から）



2. 調査前現況（南から）

図版 2



1. 東壁基本層序（西から）



2. 東壁基本層序近景①（西から）



3. 東壁基本層序近景②（西から）



4. 土層観察ベルト断面上層（南から）



5. 土層観察ベルト断面下層（南から）



1. 第1面全景（南から）



2. 第2面全景（南から）

図版 4



1. 1号竪穴住居跡完掘（西から）



2. 1号竪穴住居跡土層断面 A・B（東から）



3. 2号竪穴住居跡カマド（南から）



4. 2・4号竪穴住居跡土層断面（東から）



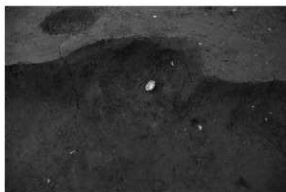
5. 4号竪穴住居跡完掘（北から）



1. 3号竪穴住居跡完掘（南から）



2. 3号竪穴住居跡土層断面C（北から）



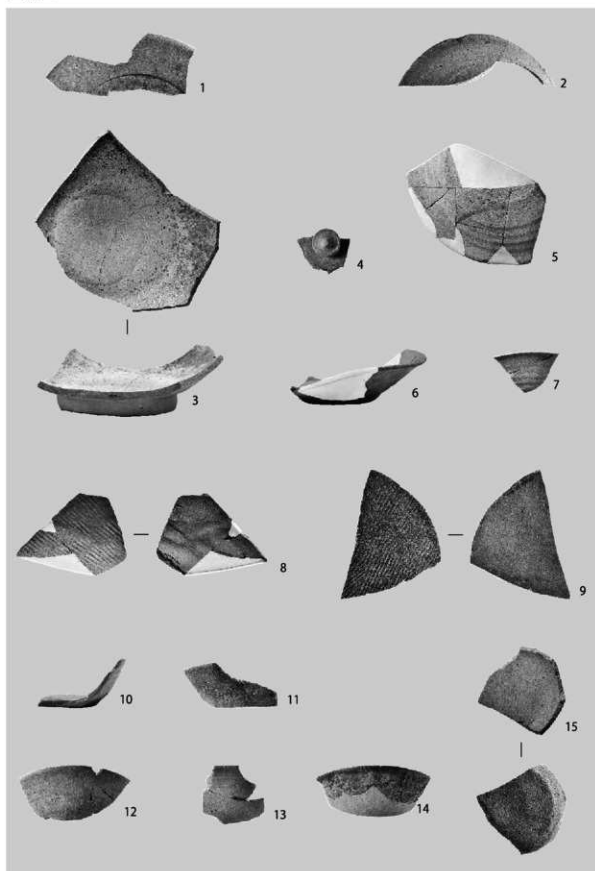
3. 3号竪穴住居跡カマド（南から）



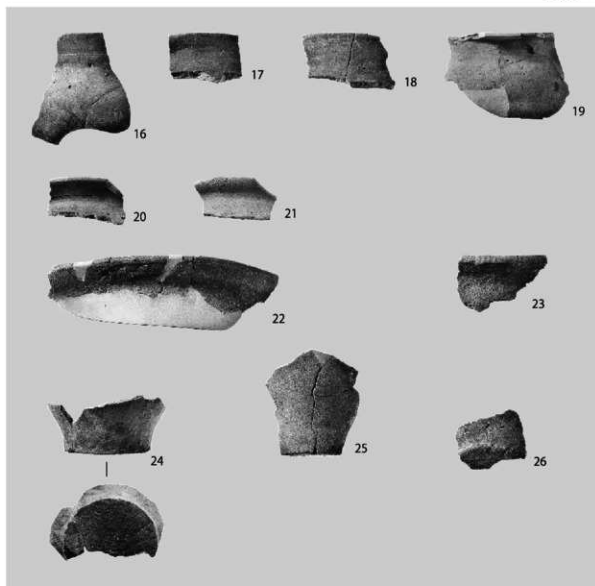
4. 3号竪穴住居跡カマド掘り方（南から）



5. 作業風景



1号竖穴住居跡 出土遺物①

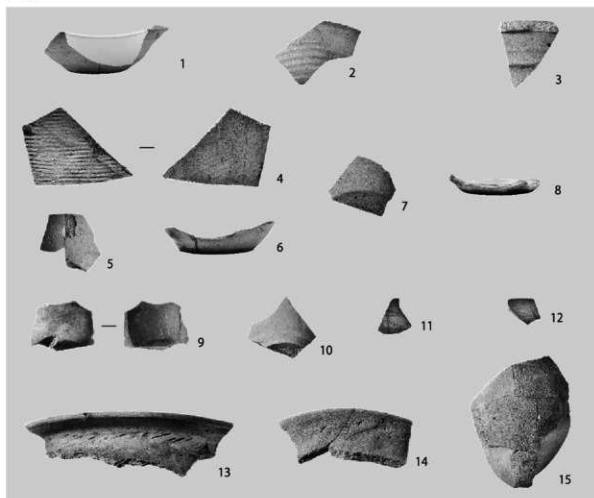


1. 1号竖穴住居跡 出土遺物②



2. 1号竖穴住居跡 出土遺物③

图版 8



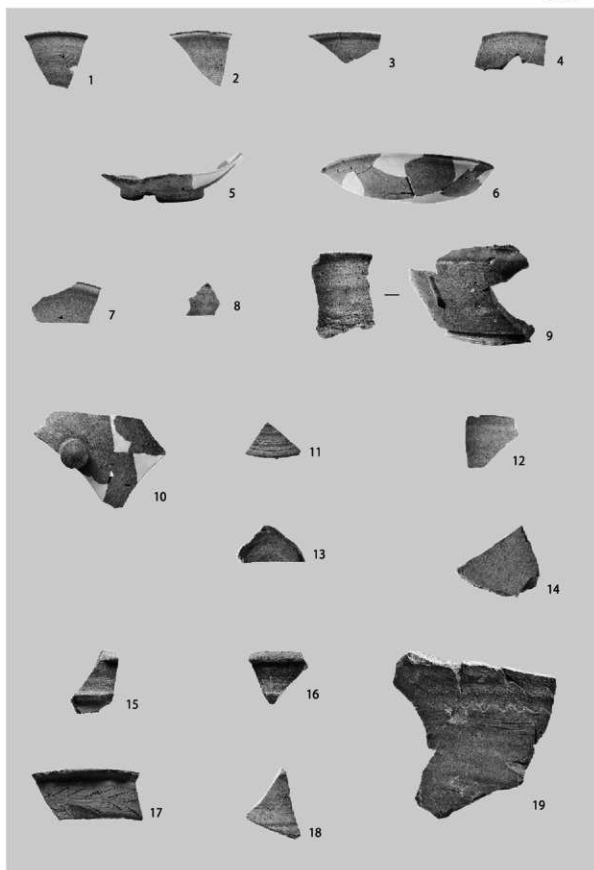
1. 2号竖穴住居跡 出土遺物



2. 3号竖穴住居跡 出土遺物

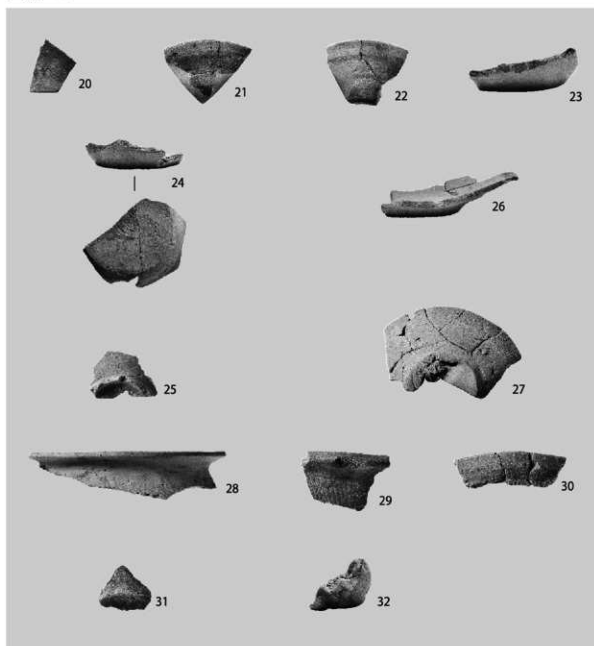


3. 4号竖穴住居跡 出土遺物



遺構外 出土遺物（奈良・平安時代①）

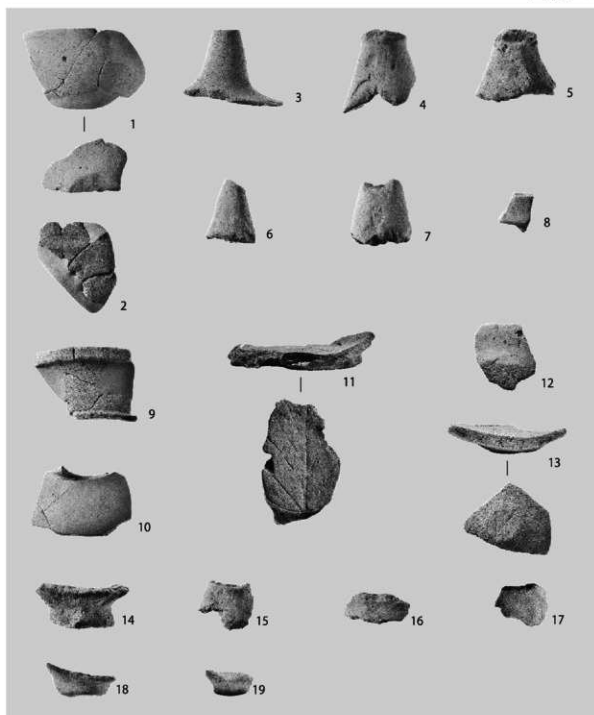
図版 10



1. 遺構外 出土遺物（奈良・平安時代②）



2. 遺構外 出土遺物（古墳時代後期）



1. 遺構外 出土遺物（古墳時代中期）



2. 遺構外 出土遺物（古墳時代前期・弥生時代後期）

報告書抄録

ふりがな	おさとまいいせき・いはりやかたあと (だいよじ)								
書名	小里前遺跡・庵原館跡 (第4次)								
副書名	清水富士宮線 (16区) 建設に伴う発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	静岡市埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号									
編著者名	天石夏実・市川康弘								
編集機関	大成エンジニアリング株式会社 埋蔵文化財調査部門								
所在地	〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1番地1 FORECAST 早稲田FIRST 8F TEL03(5285)3155								
発行年月日	2018 (平成30) 年3月28日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "				
小里前遺跡 庵原館跡	静岡県静岡市清水区 庵原町1561	22201	C-68・69	35° 03' 00"	138° 28' 27"	20170712 ～ 20171106	480㎡	道路建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
小里前遺跡 庵原館跡	集落跡	弥生時代			弥生土器			・手焙形土器が出土	
		古墳時代							
		奈良時代～ 平安時代	竪穴住居跡	4軒	灰釉陶器・須恵器・土師器・石製品			・甲斐・遠江・尾張等 他地域の土器が出土	
				ピット					8基
				平安時代末～ 中世					ピット
要約	奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡を4軒確認し、これらの遺構及びその周辺から、黒書土器や甲斐・遠江・尾張地域をはじめとした隣接する他地域の土器が出土した。同遺跡におけるこれまでの3回に亘る調査成果を補完する成果が得られたと考えられる。 河川氾濫による滅失などによって当該地に営まれた全ての竪穴住居跡を確認することは叶わなかったが、奈良～平安時代の集落範囲が北側にも広がりをみせることが確認できた意義は大きい。								

静岡市埋蔵文化財調査報告

小里前遺跡・庵原館跡（第4次）

—清水富士宮線（16区）建設に伴う発掘調査報告書—

発行日 平成30年3月28日

発 行 静岡市教育委員会

印 刷 能登印刷株式会社

